茨城県教育財団文化財調査報告第378集

坊内遺跡
貝塚古墳群

一般県道矢幡潮来線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県潮来土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第378集
坊内遺跡　貝塚古墳群
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第378集

坊内遺跡
貝塚古墳群

一般県道矢幡潮来線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県潮来土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では，県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために，一般国道や主要地方道などの広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として茨城県潮来土木事務所は，潮来市築地地区において，一般県道矢幡潮来線道路改良事業を計画しました。しかしながら，その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である坊内遺跡と貝塚古墳群が所在し，記録保存の措置を講ずる必要があるため，当財団が茨城県潮来土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け，平成23年４月から５月までの２か月間にわたりこれを実施しました。

本書は，坊内遺跡及び貝塚古墳群の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育･文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から本書の刊行に至るまで，委託者であります茨城県潮来土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，潮来市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，深く感謝申し上げます。

平成25年 ３月

公益財団法人茨城県教育財団

理 事 長　鈴 木 欣 一

例　　言

1　本書は，茨城県潮来土木事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成23年度に発掘調査を実施した茨城県潮来市築地字坊内153番地4ほかに所在する坊内遺跡及び，茨城県潮来市築地字ムクリ山402番地2ほかに所在する貝塚古墳群の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調査　平成23年4月1日～5月31日

整理　平成25年1月1日～3月31日

3　発掘調査は，調査課長樫村宣行のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　皆川　修

首　席　調　査　員　　寺内久永

主　任　調　査　員　　兼子博史

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長原信田正夫のもと，首席調査員寺内久永が担当した。

5　貝塚古墳群の文字資料については，国立歴史民俗博物館館長の平川南氏に御指導頂いた。

6　茨城県潮来市の坊内遺跡と貝塚A貝塚については，潮来市教育委員会から資料を送付して頂いた。

凡　　例

1　遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，両遺跡を包含できるように，X＝－2,680 m，Y＝＋64,760 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3，…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　SD －溝跡　SI －竪穴住居跡　SK －土坑　PG －ピット群

遺物　DP －土製品　Q －石器　TP －拓本記録土器

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は坊内遺跡が250分の1，貝塚古墳群が120分の1，各遺構の実測図については原則として60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は，原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

□ 焼土・施釉　□ 炉・火床面　■ 炭化材

●土器　○土製品　－・－・硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量で記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記については，次のとおりである。

(1) 現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。計測値の単位はm，cm，gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　遺構の「主軸」は，最長の軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
坊内遺跡・貝塚古墳群の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 3
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　坊内遺跡 …… 9
　第１節　調査の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 10
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 10
　　（1）竪穴住居跡 …… 10
　　（2）土坑 …… 11
　　２　その他の遺構と遺物 …… 18
　　（1）土坑 …… 18
　　（2）ピット群 …… 21
　　（3）遺構外出土遺物 …… 22
　第４節　まとめ …… 25
第４章　貝塚古墳群 …… 29
　第１節　調査の概要 …… 29
　第２節　基本層序 …… 29
　第３節　遺構と遺物 …… 30
　　１　中世以降の遺構と遺物 …… 30
　　溝跡 …… 30
　　２　その他の遺構と遺物 …… 32
　　（1）埋没谷 …… 32
　　（2）遺構外出土遺物 …… 33
　第４節　まとめ …… 35
写真図版 …… PL 1～PL 6
抄　録

坊内遺跡・貝塚古墳群の概要

遺跡の位置と調査の目的

坊内遺跡と貝塚古墳群は，県の南東部に位置する潮来市の中央部に所在しています。両遺跡は，北浦と常陸利根川に面した南北に延びる行方台地上の標高約 32 mの平坦地に立地しています。一般県道矢幡潮来線道路改良事業に伴い，遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため，茨城県教育財団が平成 23 年度に，坊内遺跡は 207㎡，貝塚古墳群は 74㎡について発掘調査を行いました。

調査区域は，行方台地の南部に位置し，遺跡の西側には深い谷が入り込み，水田地帯に面して急な斜面となっています。台地中央部は平坦で，東側は谷に向かってなだらかに傾斜しています。坊内遺跡と貝塚古墳群は，約 240 m離れており，谷を一つ挟んで南北に位置しています。

坊内遺跡・貝塚古墳群遠景（南から）

坊内遺跡の調査の内容と結果

調査の結果，竪穴住居跡，土坑，ピット群などが確認できました。主な出土遺物は，縄文土器，須恵器，石器などです。竪穴住居跡は，炉や柱穴が確認でき，土器の様相から縄文時代中期に位置付けられます。土坑も，縄文時代中期にみられる形状で，集落に伴う貯蔵穴群と考えられます。調査区域外には縄文土器が散布しており，台地上に集落が広がっていたと推測できます。

調査区域全景

縄文土器片集合

貝塚古墳群の調査の内容と結果

調査の結果，溝跡と埋没谷が確認できました。主な出土遺物は，縄文土器，陶器，磁器，土製品などです。溝跡は，旧道に伴う側溝と捉えられ，陶磁器の出土状況から中世から近世にかけて埋没したと考えられます。埋没谷は，行方台地によくみられる砂層上面に関東ロームに由来する土砂が再堆積した状況で，東側の谷に向かって埋没していったようです。

調査区域全景

埋没谷調査状況

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

平成 20 年８月７日，茨城県潮来土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，一般県道矢幡潮来線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成 21 年４月７日に坊内遺跡・貝塚古墳群の現地踏査を，平成 22 年６月８日に坊内遺跡，平成 22 年 10 月 20 日，12 月３日に貝塚古墳群の試掘調査をそれぞれ実施し，両遺跡の所在を確認した。平成 22 年８月 26 日に坊内遺跡，12 月６日に貝塚古墳群について，茨城県教育委員会教育長は茨城県潮来土木事務所長あてに，事業地内に遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

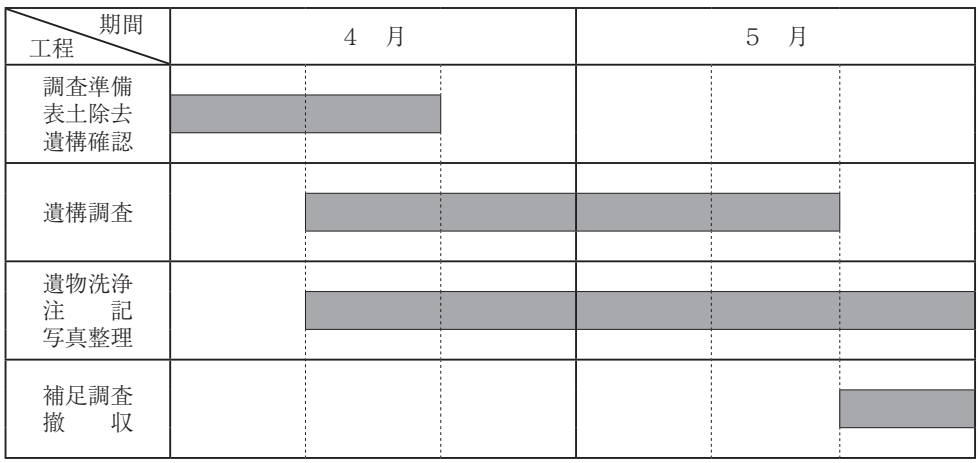
平成 22 年 11 月２日，茨城県潮来土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第 94 条の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，平成 22 年 12 月 10 日，茨城県潮来土木事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成 23 年２月 21 日，茨城県潮来土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，一般県道矢幡潮来線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成 23 年２月 22 日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県潮来土木事務所長あてに，坊内遺跡と貝塚古墳群における発掘調査の範囲及び面積等について回答し，あわせて調査機関として，財団法人茨城県教育財団（平成 24 年４月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県潮来土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，坊内遺跡，貝塚古墳群の発掘調査を平成 23 年４月１日から５月 31 日まで実施した。

第２節　調　査　経　過

坊内遺跡と貝塚古墳群の調査は，平成 23 年４月１日から５月 31 日までの２か月間にわたって，両遺跡を並行して実施した。以下，その概要を表で記載する。



第2章　位　置　と　環　境

第1節　地 理 的 環 境

坊内遺跡は，茨城県潮来市築地字坊内153番地４ほかに，貝塚古墳群は，茨城県潮来市築地字ムクリ山402番地２ほかに所在している。

潮来市は県の南東部に位置し，東部は北浦に面し，西部は常陸利根川に面している。市域の地形は，行方台地の南東部にあたる洪積台地と，北浦や常陸利根川沿岸の沖積低地に大別され，北部が台地，南部が低地となっている。洪積台地の標高は北西部で約39 m，南東部で約31 mと北西から南東に傾斜した地形である。また，この台地は，各河川に開析された樹枝状の谷が奥深くに入り込み，複雑な地形を形成している。

台地の地質は，古東京湾に堆積した成田層を基盤とし，シルト質の下層部と砂質の上層部からなっている。その上には凝灰質の常総粘土層，関東ローム層が順に堆積し表土に至っている。低地は，利根川や支流の働きによって運ばれた土砂や台地から流失した腐食植物，砂礫，砂泥，砂等が堆積して形成されている。

両遺跡は，市域の中央部に位置し，北東約３kmのところに位置する北浦と，外浪逆浦に流入する常陸利根川に挟まれた標高約32mの台地上に位置している。遺跡の立地する台地の西側には深い谷が入り込み，急な斜面を経て常陸利根川に続く低地に面している。台地の中央部は平坦で，北に向かって広がっており，東側はなだらかに傾斜している。調査前の現況は畑地や荒地である。

第2節　歴 史 的 環 境

潮来市には，縄文時代から近世まで大小145以上の遺跡が確認されており[1)]，その多くは北浦沿岸と，霞ヶ浦沿岸から常陸利根川沿岸の洪積台地縁辺部に分布している。ここでは，当遺跡と周辺遺跡の概要について記述する。

縄文時代の遺跡として，狭間（はざま）貝塚[2)]〈62〉，塙（はなわ）貝塚[3)]，江寺（えでら）遺跡〈７〉，若槇（わかまき）遺跡〈９〉などがある。坊内遺跡から南へ約1.5kmに位置する狭間貝塚は，縄文時代に形成された貝塚で，ハマグリ，マガキ，マテガイ等を含む貝層が確認され，他に魚骨やイノシシ，シカの骨等が出土している。出土した土器は野島式土器，鵜ヶ島台式土器，茅山下層式土器が主であり，縄文時代早期の貝塚に比定されている。この時期は，縄文海進が最も進行した時期とされ，貝塚（かいづか）Ａ貝塚〈５〉，貝塚Ｂ貝塚〈６〉，横山（よこやま）貝塚〈27〉，妙光寺裏遺跡（みょうこうじうら）松葉（まつば）貝塚〈16〉，妙光寺裏遺跡後野（うしろの）貝塚〈17〉，中郷（なかごう）貝塚〈39〉，塔之上（とうのうえ）貝塚〈63〉などが内陸の台地上で確認されており，北浦や霞ヶ浦に注ぐ各河川の奥深くまで海水が流入していたことを物語っている。貝塚Ａ貝塚では，縄文時代中期の住居跡13軒が確認されている[4)]。塙貝塚は，当遺跡から北に約３kmの北浦に面した舌状台地に位置し，調査区域が貝塚本体ではないため，古墳時代以降の集落跡が主な報告内容となっているが[5)]，調査区域から出土した縄文土器は阿玉台式土器や加曽利Ｅ式土器などの中期を中心としており，野島式や鵜ヶ島台式，浮島式等の早期や前期の土器もみられることから，縄文時代の集落が近くに存在し，その時期の貝塚が形成されていたことが想定できる。また，横山貝塚は地点貝塚で，獣骨や貝製腕輪などが検出されたという記録が残っている[6)]。

弥生時代の遺跡は，貝塚Ａ貝塚，田ノ森（たのもり）遺跡〈26〉，梶内（かじうち）遺跡〈29〉などがあげられ，北浦や常陸利根川に

面する台地上に弥生土器の散布が見られる[7]。塙貝塚からは，住居跡１軒が確認されている。この住居跡は，古墳時代の住居と重複し，壁と床の一部が残存するだけだが，出土土器から後期中葉の時期に比定されている。

古墳時代になると中央の支配が地方へも及ぶことになる。象徴的なのは，台地上に築造された古墳で，常陸利根川を南に臨む台地上に所在する稲荷山古墳群〈68〉を始めとして，大生西部古墳群〈20〉，大生東部古墳群〈21〉，棒山古墳群等数々の古墳群が確認できる。大生西部古墳群の１号墳は，昭和 27 年に調査が行われ，６世紀後半の時期に比定されている[8]。また，棒山古墳群の１号墳（庚申塚古墳）も発掘調査による記録が残されている[9]。当時代の集落跡としては，塙貝塚，大賀立野遺跡，古高覚宗遺跡〈36〉，梶内遺跡，大生西遺跡などが挙げられる。塙貝塚では，中期の住居跡が３軒，後期の住居跡が５軒ほど確認されている。大賀立野遺跡では，後期の住居跡が 38 軒確認されている。また，古高覚宗遺跡，梶内遺跡，大生西遺跡からは後期の土器が採集され，北浦に面した台地上にそれぞれの集落が形成されていたと考えられる[10]。

律令期には，当地域は行方郡大生郷に属しており，行方郡衙は現在の行方市行方（旧麻生町行方）に置かれていたと推定されている[11]。坊内遺跡に隣接する熱田神社には，大和武尊が祀られており，806 年（大同元年）に社殿がつくられたと伝えられている。近隣の当時代の遺跡としては，貝塚Ａ貝塚，古高覚宗遺跡，梶内遺跡，田ノ森遺跡等があげられる。田ノ森遺跡では，平安時代の住居跡が２軒確認されている[12]。

行方郡は，1139 年（保延５）に鹿島社に寄進されて鹿島社領となる。そして当地域は，常陸平氏とその一族である大掾氏の支配下に置かれるようになり[13]，地頭職の島崎氏，行方氏（後の小高氏），麻生氏，玉造氏の各氏が拠点を持つようになる。島崎城は，島崎氏の居城で土塁や堀跡，井戸や馬出しの跡などが現存しており，当時の栄華をうかがうことができる。その後，当地域にも佐竹氏の支配の手が伸びるが，長くは続かず，徳川氏の所領となる。江戸時代には，地方と江戸を結ぶ水運の要所となり，水郷潮来の名を今に伝えている。

※　文中の〈　〉内の番号は，第１図及び表１中の該当遺跡番号と同じである。

註

１）潮来市教育委員会『潮来市遺跡地図』潮来市　2003 年３月

２）茂木雅博　袁靖　吉野健一「常陸狭間貝塚」『茨城大学人文学部 考古学研究報告』 茨城大学人文学部文化財情報学教室　1995 年 10 月

３）高村勇「一般県道矢幡潮来線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　塙貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第42集　1987年３月

４）汀安衛編「貝塚Ａ貝塚遺跡発掘調査報告書」『潮来町埋蔵文化財調査報告書』貝塚Ａ貝塚遺跡調査会　1999 年６月

５）註３に同じ

６）潮来町郷土史研究会編『ふるさと潮来』第５号　1980 年 11 月

７）註１に同じ

８）大場磐雄『常陸大生古墳群』 潮来町教育委員会　1971 年５月

９）海老原幸編『棒山古墳群発掘調査報告書』潮来町教育委員会　1981 年３月

10）潮来町史編さん委員会『潮来町史』 潮来町　1996 年３月

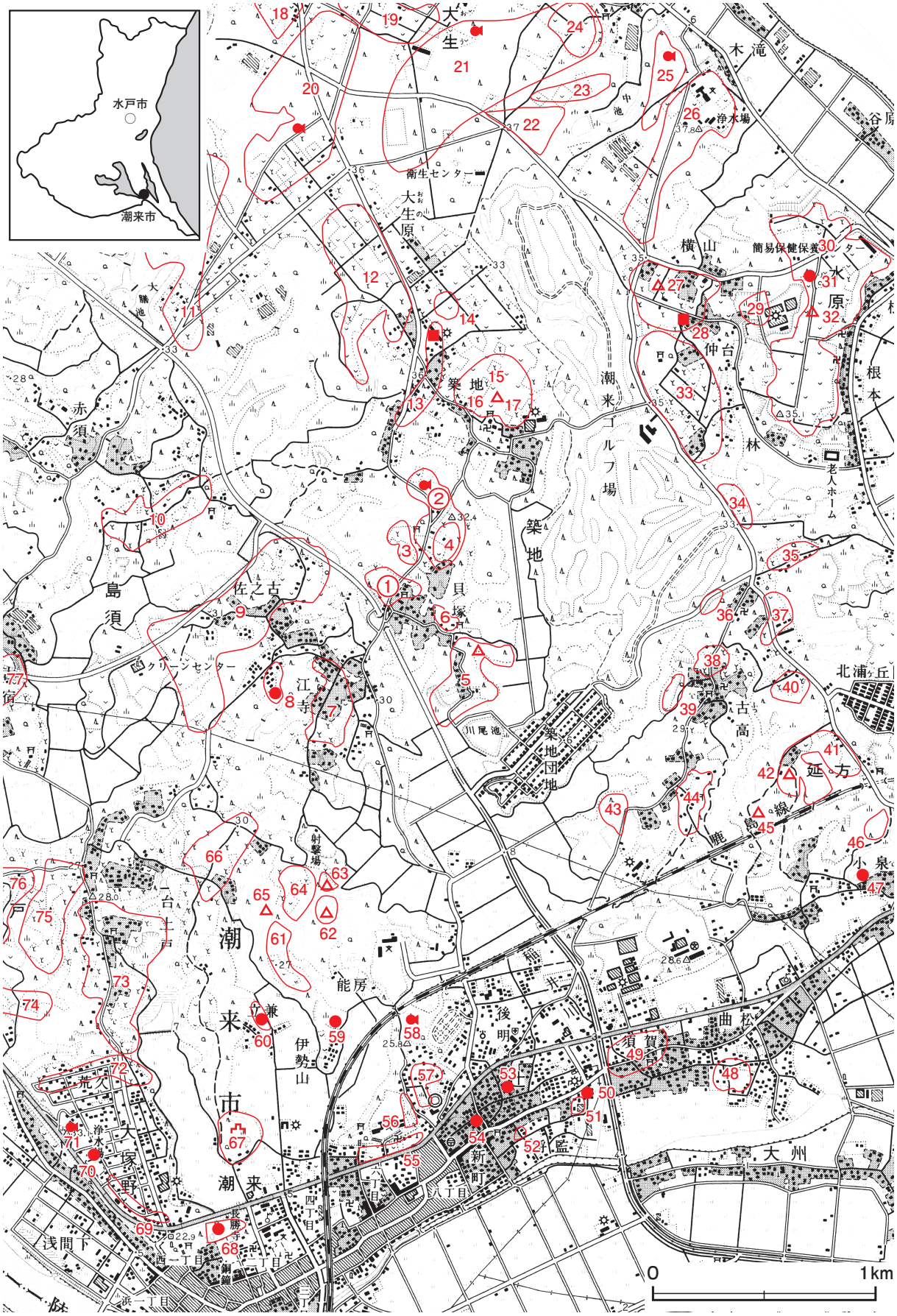
11）註 10 に同じ

12）山武考古学研究所編『田ノ森遺跡』潮来市遺跡調査会　2001 年６月

13）茨城地方史研究会編『茨城の歴史　県南・鹿行編』 茨城新聞社　2002 年 12 月

参考文献

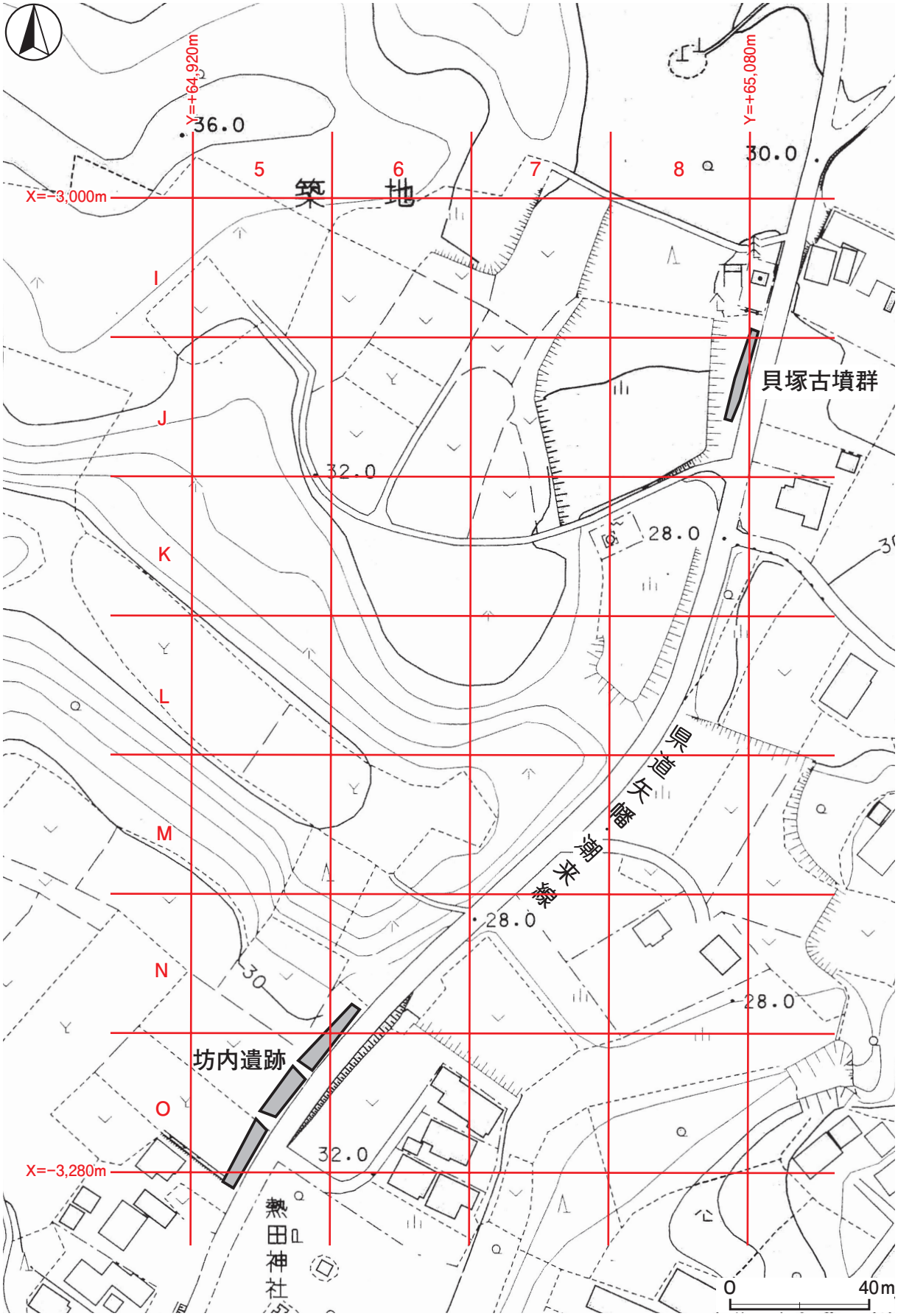
茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』茨城県　2001 年３月



第１図　坊内遺跡・貝塚古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「潮来」）

表１　坊内遺跡・貝塚古墳群遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	坊内遺跡		○					
②	貝塚古墳群				○		○	
3	ムクリ山遺跡		○					
4	向野菱山遺跡		○		○	○		
5	貝塚Ａ貝塚		○	○		○		
6	貝塚Ｂ貝塚		○					
7	江寺遺跡		○		○	○		
8	原古墳群				○			
9	若槇遺跡		○					
10	前中遺跡					○		
11	今林遺跡				○			
12	大生原源立遺跡			○	○	○		
13	境塚古墳群				○			
14	大生原遺跡				○			
15	妙光寺裏遺跡		○		○			
16	妙光寺裏遺跡松葉貝塚		○					
17	妙光寺裏遺跡後野貝塚		○					
18	前倉遺跡				○	○		
19	大平遺跡					○	○	
20	大生西部古墳群				○			
21	大生東部古墳群				○			
22	釜谷古墳群				○			
23	台山遺跡		○		○			
24	西ノ内遺跡		○		○	○		
25	田ノ森古墳群				○			
26	田ノ森遺跡			○	○	○		
27	横山貝塚		○		○	○		
28	仲台古墳群				○			
29	梶内遺跡			○	○	○		
30	浜ノ原遺跡		○		○			
31	水原古墳群				○			
32	浜ノ原遺跡西畑貝塚		○					
33	林遺跡		○					
34	原内遺跡		○		○			
35	台ノ窪イノ山遺跡		○		○			
36	古高覚宗遺跡		○	○	○	○	○	
37	栗坪イノ山遺跡					○		○
38	平遺跡					○		
39	中郷貝塚		○					
40	永代寺遺跡			○	○			
41	湯谷遺跡			○	○	○		
42	湯谷遺跡貝塚				○			
43	大平館跡						○	
44	荒井遺跡		○					
45	平池貝塚		○					
46	アバダイ遺跡					○		
47	小泉古墳				○			
48	曲松遺跡				○		○	
49	稲井川遺跡		○		○	○		
50	天王原古墳				○			
51	天王原遺跡				○	○		
52	中辻遺跡				○	○		
53	中辻古墳				○			
54	後明古墳				○			
55	潮来台下遺跡					○		
56	天王台遺跡						○	
57	南作遺跡					○		
58	こんにゃく塚古墳				○			
59	新立古墳				○			
60	立金古墳群				○			
61	扇台遺跡		○		○	○		
62	狭間貝塚		○					
63	塔之上貝塚		○					
64	能房遺跡		○		○			
65	御殿山貝塚		○			○		
66	原堂遺跡		○					
67	潮来陣屋跡							○
68	稲荷山古墳群				○			
69	大塚野１丁目遺跡				○	○		
70	大塚野古墳				○			
71	浅間塚古墳				○			
72	大塚野２丁目遺跡				○	○		
73	前野遺跡		○				○	
74	観音寺古墳群				○			
75	地頭内遺跡		○					
76	尾ノ詰遺跡					○	○	
77	内野遺跡					○		



第２図　坊内遺跡・貝塚古墳群調査区設定図（潮来市都市計画図 2,500 分の 1 から作成）

第３章　坊　内　遺　跡

第１節　調 査 の 概 要

坊内遺跡は，茨城県潮来市築地字坊内153番地４ほかに所在し，常陸利根川の左岸標高32mの台地上に位置している。この台地は，東側に北浦を望む舌状台地で，樹枝状の谷が不規則に入り込み複雑な地形を形成している。遺跡の範囲は，東西に約270 m，南北に約170 mで台地の平坦部に広がっている。調査区域は，遺跡の西部に位置し，北西側が沖積低地に面する北東から南西にかけての細長い範囲である。調査面積は207㎡で，調査前の現況は畑地である。

調査の結果，竪穴住居跡１軒（縄文時代），土坑21基（縄文時代・時期不明），ピット群１か所（時期不明）を確認した。

遺物は，遺物コンテナ（60 × 40 × 20cm）に２箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢），須恵器（坏・蓋・甕），石器（磨石），土製品（土器片錘）などである。

第２節　基　本　層　序

調査区南部（Ｏ５b9）にテストピットを設定し，基本土層（第３図）の観察を行った。以下，観察結果から層序を説明する。

第１層は黒褐色を呈する耕作土層である。層厚は24 ～ 30cmである。

第２層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は17 ～ 39cmである。

第３層は明褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は７～ 34cmである。

第４層は暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は17 ～ 33cmである。

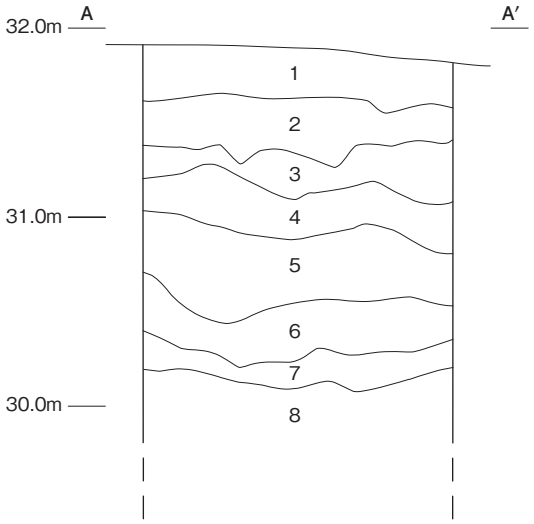
第５層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにもっとも強く，層厚は28 ～ 51cmである。

第６層は明褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は18 ～ 31cmである。

第７層は褐色を呈するハードローム層で，粘土粒子を微量含んでいる。粘性・締まりともに強く，層厚は７～ 20cmである。

第８層はにぶい褐色を呈するハードローム層で，粘土粒子を少量含んでおり，常総粘土層への漸移層である。粘性・締まりともに強く，層厚は30cm以上で，さらに下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は，第２層の上面で確認した。



第３図　基本土層図

第３節　遺 構 と 遺 物

１　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竪穴住居跡１軒，土坑 11 基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

（1）竪穴住居跡

第１号住居跡（第４・５図）

位置　調査区南部のＯ５i4 区，標高 32 mの平坦な台地上に位置している。

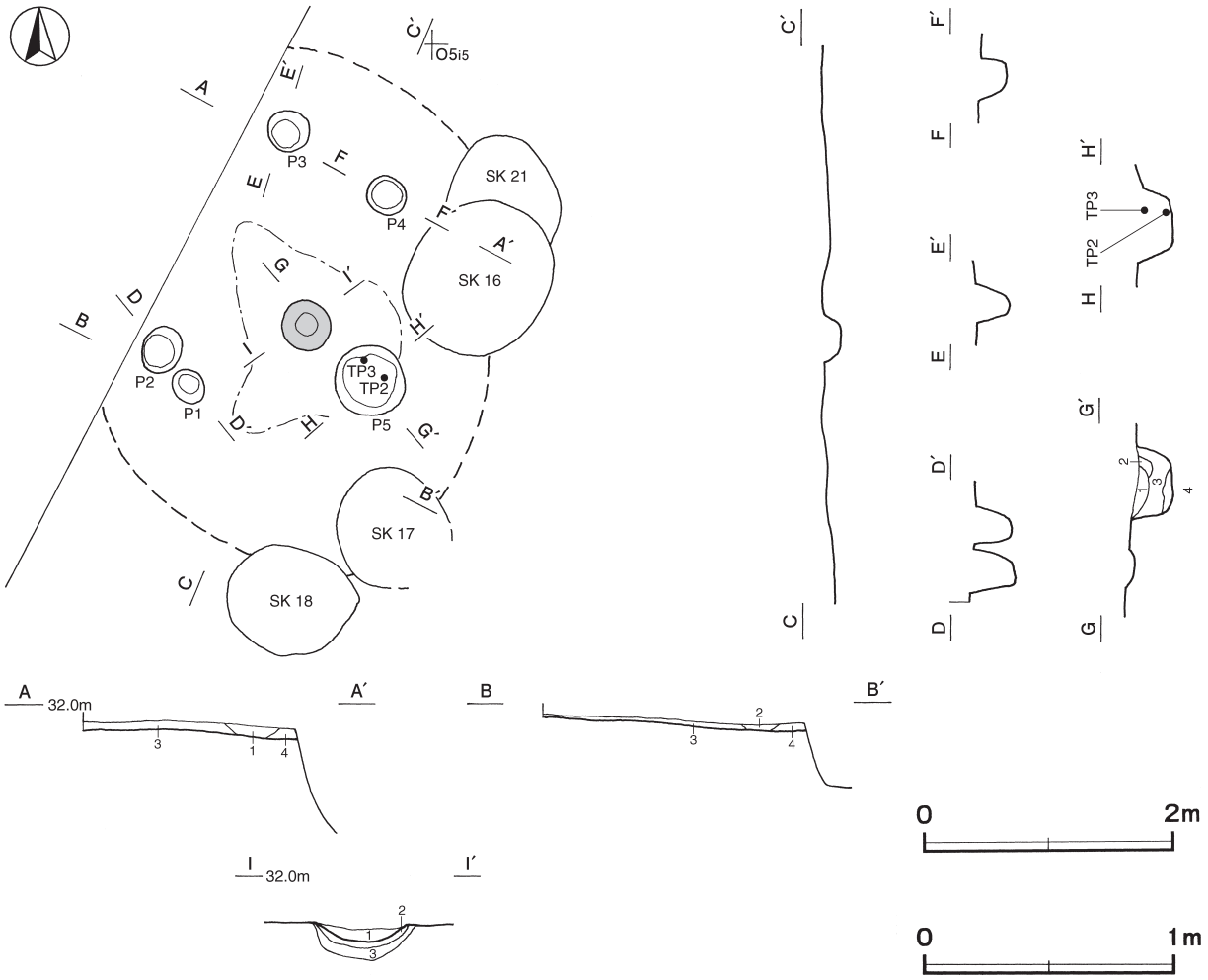
確認状況　遺構確認面で，炉の痕跡と硬化面の一部を確認した。

重複関係　第 16 ～ 18・21 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　北西部が調査区域外に延びていることと，わずかに覆土が残存している状況であったので，明確な規模は不明であるが，炉と柱穴の配置から軸長４ｍほどと推測できる。

床　ほぼ平坦で，炉のまわりに硬化面が確認できた。

炉　径 39cm の円形で，床面を 19cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化しており，使用頻度の高さがうかがわれる。第２・３層は，炉床面の構築土である。



第４図　第１号住居跡実測図

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は不規則な配列ながら，主柱穴と考えられる。Ｐ５は径57cmの円形で，覆土に焼土やわずかな灰が含まれていた。炉と近接していることや硬化面の広がりから類推すると貯蔵穴の可能性も考えられるが，詳細は不明である。

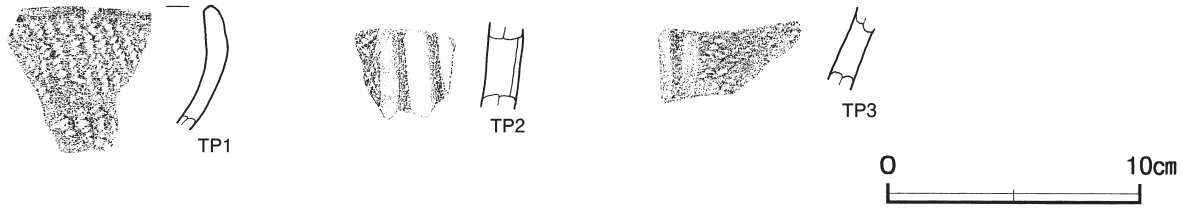
Ｐ５土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　炭化粒子中量，焼土粒子少量，ロームブロック微量

覆土　４層に分層できる。層厚が薄く，全体の様相は不明瞭であるが，不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　縄文土器片７点（深鉢）が出土している。TP２はＰ５の覆土下層から，TP３はＰ５の覆土上層から出土している。その他，混入した土製品１点（不明）も出土している。

所見　時期は，出土土器や重複関係から中期後葉（加曽利ＥⅡ～ＥⅣ式期）と考えられる。



第５図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	手法の特徴ほか	出土位置	備　考
TP１	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	２段RL単節縄文を施文	覆土中	PL３
TP２	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	２条の隆帯を形成　LR縄文を施文	Ｐ５覆土下層	PL３
TP３	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	暗褐	１条の隆帯が残存　LR縄文を縦位回転で施文	Ｐ５覆土上層	PL３

（2）　土坑

第２号土坑　（第６図）

位置　調査区中央部のＯ５e7区，標高32ｍの台地平坦部に位置している。

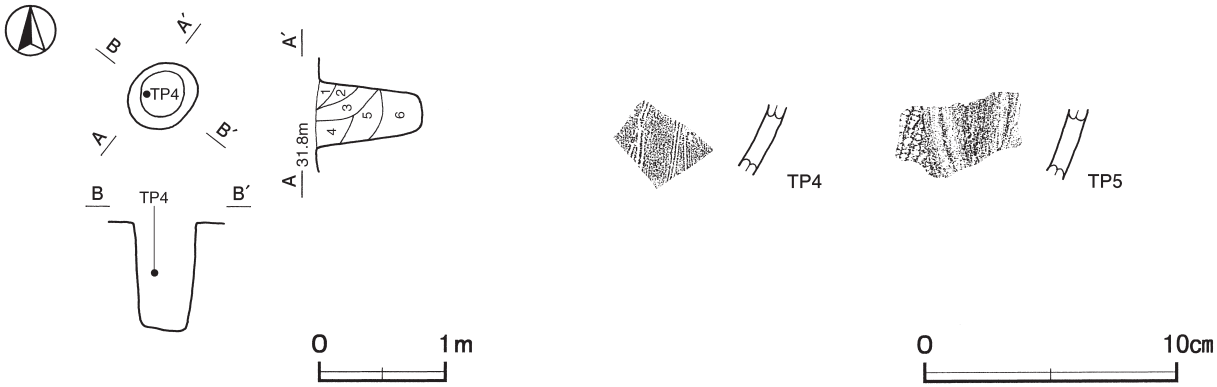
規模と形状　長径0.58ｍ，短径0.47ｍの楕円形で，長径方向はＮ－57°－Ｅである。深さは86cmで，底面は平坦である。壁は，直立している。

覆土　６層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量
5　暗　褐　色　ローム粒子微量
6　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　縄文土器片３点（深鉢）が出土している。TP ４は，西部の覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式期）と考えられる。



第６図　第２号土坑・出土遺物実測図

第２号土坑出土遺物観察表（第６図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP４	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・細礫	黒褐	条線文を縦位に施文	覆土中層	
TP５	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	明赤褐	LR 縄文を施文後微隆帯と磨り消しを施す	覆土中	PL ３

第４号土坑　（第７図）

位置　調査区北部のＮ５j0 区，標高 31 mの台地平坦部に位置している。

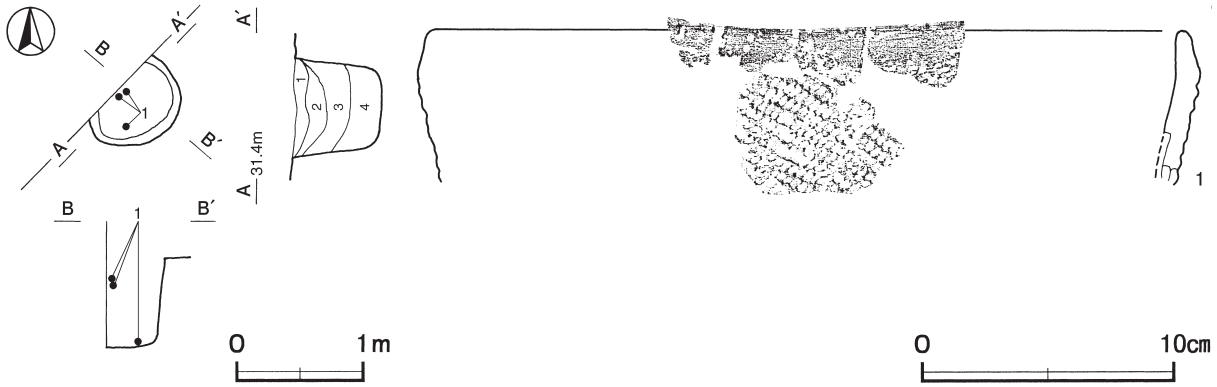
規模と形状　北西部が調査区域外に延びているため，北東･南西方向の径が 0.80 mで，北西･南東方向の径は 0.49 mしか確認できなかった。楕円形と推定でき，長径方向はＮ－ 43°－Ｅである。深さは 70cm で，底面は平坦である。壁は，直立している。

覆土　４層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説

１　暗　褐　色　ローム粒子少量
２　極暗褐色　ローム粒子少量
３　褐　　色　ロームブロック中量
４　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片７点（深鉢）が出土している。１は，覆土下層と上層から出土した破片が接合したものである。



第７図　第４号土坑・出土遺物実測図

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式期）と考えられる。

第４号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[29.6]	(6.1)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部無文帯　横方向の磨き　２段 RL 単節縄文を施文	覆土下層・上層	５％　PL ３

第５号土坑　（第８図）

位置　調査区北部のＯ５a0 区，標高 31 mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　北西部が調査区域外に延びているため，北東･南西方向の径が 0.92 mで，北西･南東方向の径は 0.56 mしか確認できなかったが，円形または楕円形と推定できる。深さは 36cm で，底面は平坦である。壁は，外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層できる。ロームブロックが多量に混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片 12 点（深鉢）が出土している。TP ６は，覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式期）と考えられる。

第８図　第５号土坑・出土遺物実測図

第５号土坑出土遺物観察表（第８図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP６	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	縄文施文後微隆帯と磨り消しを施す	覆土中層	PL ３
TP７	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	隆帯に竹管による刺突文　以下無文	覆土中	PL ３

第６号土坑　（第９図）

位置　調査区北部のＯ５a0 区，標高 31 mの台地平坦部に位置している。

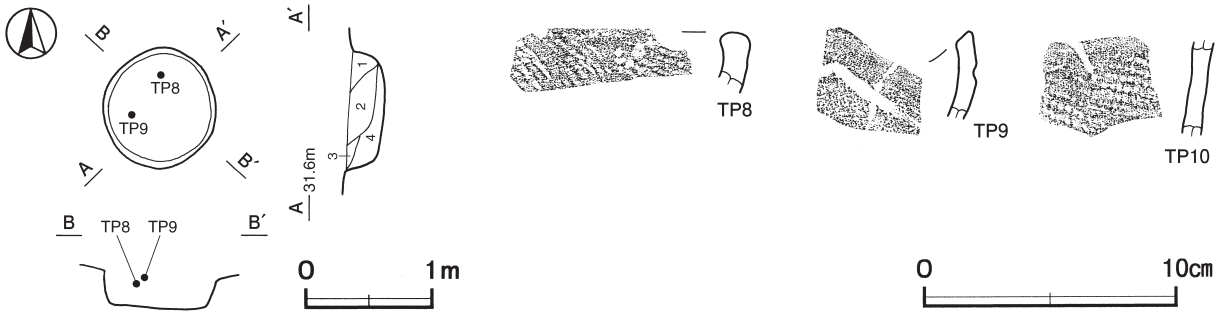
規模と形状　径 0.95 mの円形である。深さは 25cm で，底面は平坦である。壁は，直立している。

覆土　４層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック多量
4　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　縄文土器片 17 点（深鉢）が出土している。TP ８・TP ９は，覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式期）と考えられる。



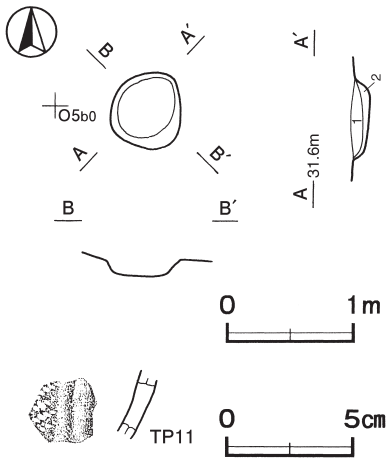
第９図　第６号土坑・出土遺物実測図

第６号土坑出土遺物観察表（第９図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP８	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	RL 無節縄文を施文	覆土上層	PL ３
TP９	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子・細礫	褐	口唇部無文　太い沈線を山形に描出	覆土上層	PL ３
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	RL 単節縄文を施文	覆土中	

第７号土坑　（第 10 図）

位置　調査区北部のＯ５b0 区，標高 31 ｍの台地平坦部に位置している。



規模と形状　径 0.62 ｍの円形である。深さは 12cm で，底面は平坦である。壁は，外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子多量

遺物出土状況　縄文土器片４点（深鉢）が出土している。TP11 は，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。

第 10 図　第７号土坑・出土遺物実測図

第７号土坑出土遺物観察表（第 10 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい褐	隆帯１条残存　RL 縄文を施文後磨り消しを施す	覆土中	PL ３

第 15 号土坑　（第 11 図）

位置　調査区南部のＯ５h5 区，標高 32 ｍの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径 1.08 ｍ，短径 0.97 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 58°－ Ｗである。深さは 95cm で，底面

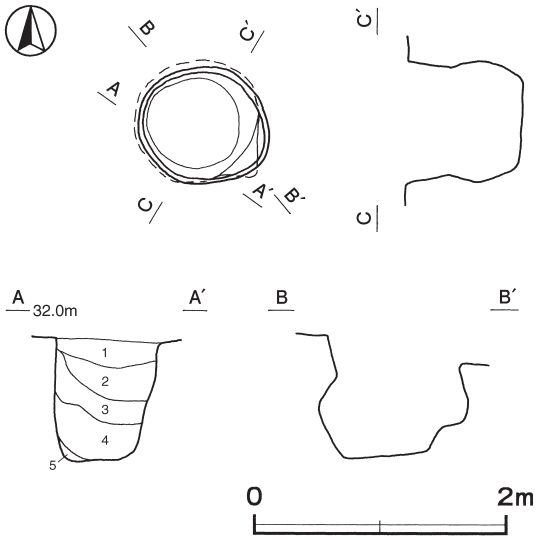
は平坦である。壁は，内傾して立ち上がっている。

覆土　５層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量
2　褐　　色　ローム粒子少量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子中量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片１点（深鉢）が出土しているが，細片のため図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 11 図　第 15 号土坑実測図

第 16 号土坑　（第 12 図）

位置　調査区南部のＯ５i5 区，標高 32 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号住居跡と第 21 号土坑を掘り込んでいる。

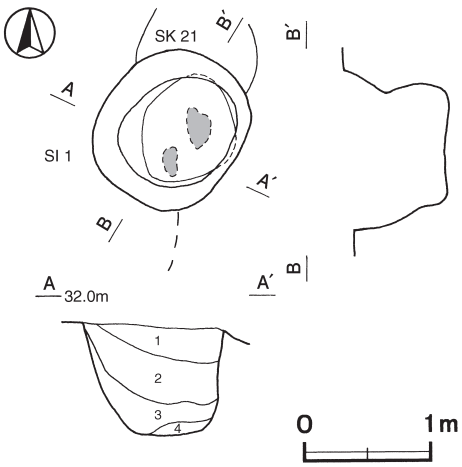
規模と形状　長径 1.27 m，短径 1.11 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 25°－Ｅである。深さは 86cm で，底面は平坦である。壁は底面付近が内傾し，上位は外傾して立ち上がっている。

覆土　４層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子少量
3　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片２点（深鉢）が出土しているが，細片のため図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。炭化物の堆積は，底面だけに確認できたもので，貯蔵穴として使用した段階で流入したと考えられることから，第１号住居跡の炭化物が流れ込んだ可能性も考えられる。



第 12 図　第 16 号土坑実測図

第 17 号土坑　（第 13 図）

位置　調査区南部のＯ５i4 区，標高 32 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号住居跡を掘り込んでいる。

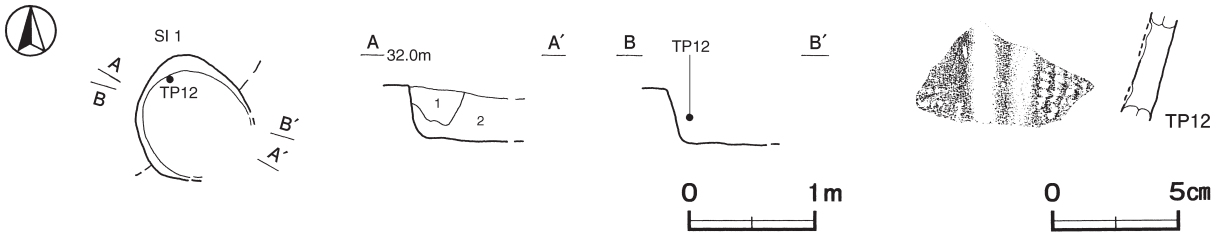
規模と形状　南東部が撹乱を受けているが，径 1.00 mの円形と推定できる。深さは 44cm で，底面は平坦である。壁は，外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　褐　　色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片７点（深鉢）が出土している。TP12 は，北部の覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。



第 13 図　第 17 号土坑・出土遺物実測図

第 17 号土坑出土遺物観察表（第 13 図）

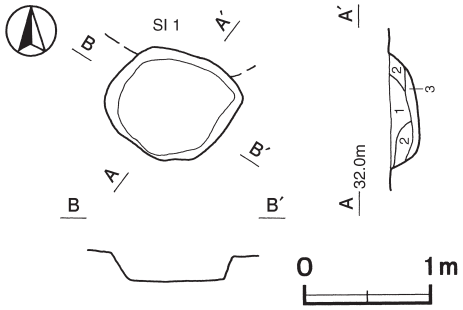
番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい褐	縄文施文後２条の隆帯を形成	覆土中層	PL ３

第 18 号土坑　（第 14 図）

位置　調査区南部のＯ５j4 区，標高 32 ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 1.10 ｍ，短径 0.88 ｍの不整楕円形で，長径方向はＮ－ 87°－Ｗである。深さは 22cm で，底面は平坦である。壁は，外傾して立ち上がっている。



第 14 図　第 18 号土坑実測図

覆土　３層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　褐　　色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片１点（深鉢）が出土しているが，細片のため図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

第 19 号土坑　（第 15 図）

位置　調査区南部のＯ５i5 区，標高 32 ｍの台地平坦部に位置している。

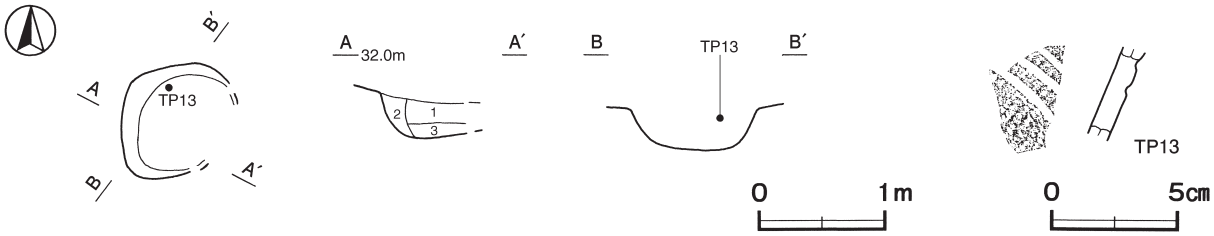
規模と形状　南東部が撹乱を受けており，北東・南西方向の径は 1.08 ｍで，北西・南東方向の径は 0.75 ｍしか確認できなかった。不整楕円形と推定でき，長径方向はＮ－ 33°－Ｅである。深さは 30cm で，底面は平坦である。壁は，外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　縄文土器片２点（深鉢）が出土している。TP13 は，北部の覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利Ｅ式期）と考えられる。



第 15 図　第 19 号土坑・出土遺物実測図

第 19 号土坑出土遺物観察表（第 15 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	LR 単節縄文を施文　３本の沈線を施す	覆土上層	PL ３

第 21 号土坑　（第 16 図）

位置　調査区南部のＯ５i5 区，標高 32 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号住居跡を掘り込み，第 16 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南部が掘り込まれているため，北西・南東方向の径が 0.93 m，北東・南西方向の径は 0.70 mしか確認できなかったが，不整円形と推定できる。深さは 82cm で，底面は平坦である。壁は，底面付近がやや内傾し，上位は外傾して立ち上がっている。

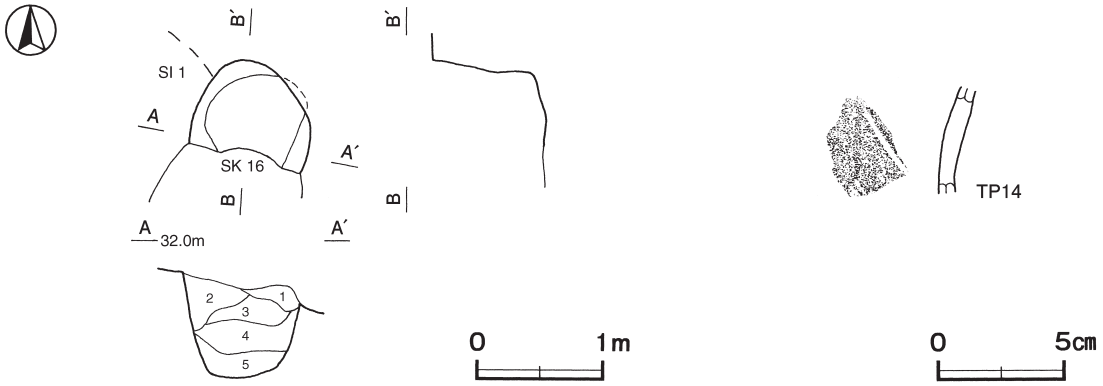
覆土　５層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　　色　ロームブロック多量
5　極 暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片１点（深鉢）が出土している。TP14 は，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利Ｅ式期）と考えられる。



第 16 図　第 21 号土坑・出土遺物実測図

第 21 号土坑出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	沈線１本残存	覆土中	PL ３

表２　縄文時代土坑一覧表

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規　　模		底　面	壁　面	覆　土	主 な 出 土 遺 物	備　考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					重複関係(古→新)
2	O５e7	N－57°－E	楕円形	0.58 × 0.47	86	平坦	直立	人為	縄文土器	
4	N５j0	N－43°－E	［楕円形］	0.80 ×（0.49）	70	平坦	直立	人為	縄文土器	
5	O５a0	－	［円形・楕円形］	0.92 ×（0.56）	36	平坦	外傾	人為	縄文土器	
6	O５a0	－	円形	0.95 × 0.89	25	平坦	直立	人為	縄文土器	
7	O５b0	－	円形	0.62 × 0.60	12	平坦	外傾	人為	縄文土器	
15	O５h5	N－58°－W	楕円形	1.08 × 0.97	95	平坦	内傾・外傾	人為	縄文土器	
16	O５i5	N－25°－E	楕円形	1.27 × 1.11	86	平坦	内傾・外傾	人為	縄文土器	SI １→SK21→本跡
17	O５i4	－	［円形］	［1.00］× 0.95	44	平坦	外傾	人為	縄文土器	SI １→本跡
18	O５j4	N－87°－W	不整楕円形	1.10 × 0.88	22	平坦	外傾	人為	縄文土器	SI １→本跡
19	O５i5	N－33°－E	［不整楕円形］	1.08 ×（0.75）	30	平坦	外傾	人為	縄文土器	
21	O５i5	－	［不整円形］	0.93 ×（0.70）	82	平坦	内傾・外傾	人為	縄文土器	SI １→本跡→SK16

２　その他の遺構と遺物

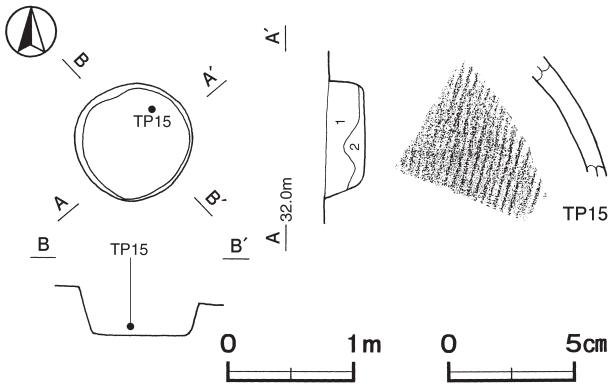
今回の調査で，時期や性格が特定できない土坑 10 基，ピット群１か所を確認した。このうち土坑２基は文章と実測図，土坑８基は実測図と一覧表，ピット群は実測図とピット計測表をそれぞれ掲載する。

（1）土坑

第１号土坑　（第 17 図）

位置　調査区中央部のＯ５d8 区，標高 32 mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　径 0.95 mの円形である。深さは 32cm で，底面は平坦である。壁は，外傾して立ち上がっている。



第 17 図　第１号土坑・出土遺物実測図

覆土　２層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　須恵器片１点（甕）が出土している。その他流れ込んだ縄文土器片４点も出土している。TP15 は，覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代以降と考えられるが，性格は不明である。

第１号土坑出土遺物観察表（第 17 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP15	須恵器	甕	長石・黒色粒子	灰白	外面縦位の平行叩き痕　自然釉	覆土下層	PL ４

第10号土坑　（第18図）

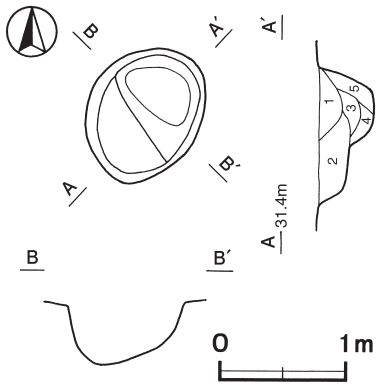
位置　調査区北部のＯ５a0区，標高31ｍの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径1.13ｍ，短径0.90ｍの楕円形で，長径方向はＮ－21°－Ｅである。深さは45cmで，底面には段差があり，北東部が一段低くなっている。壁は，外傾して立ち上がっている。

覆土　５層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で，埋め戻されている。

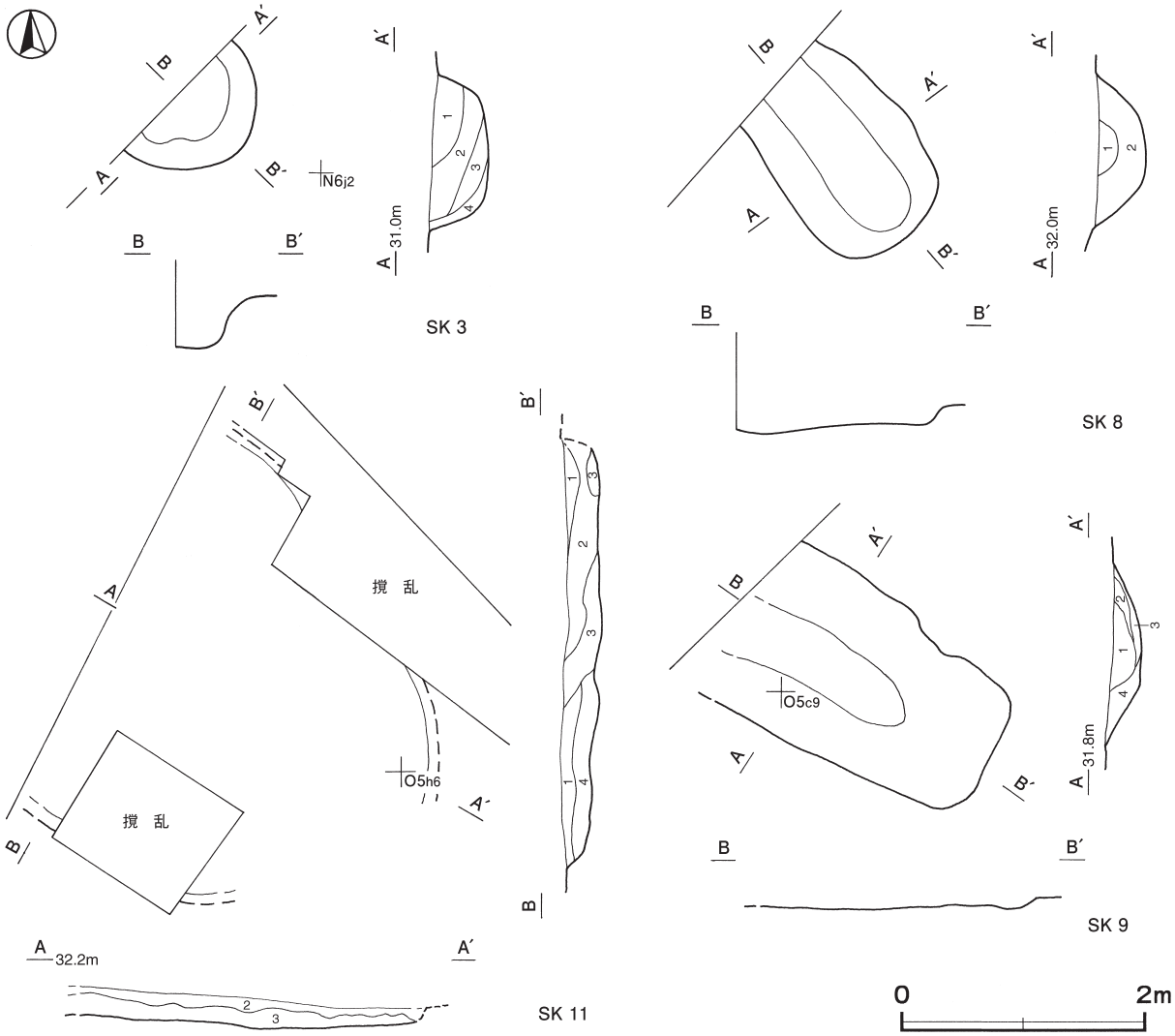
土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック中量

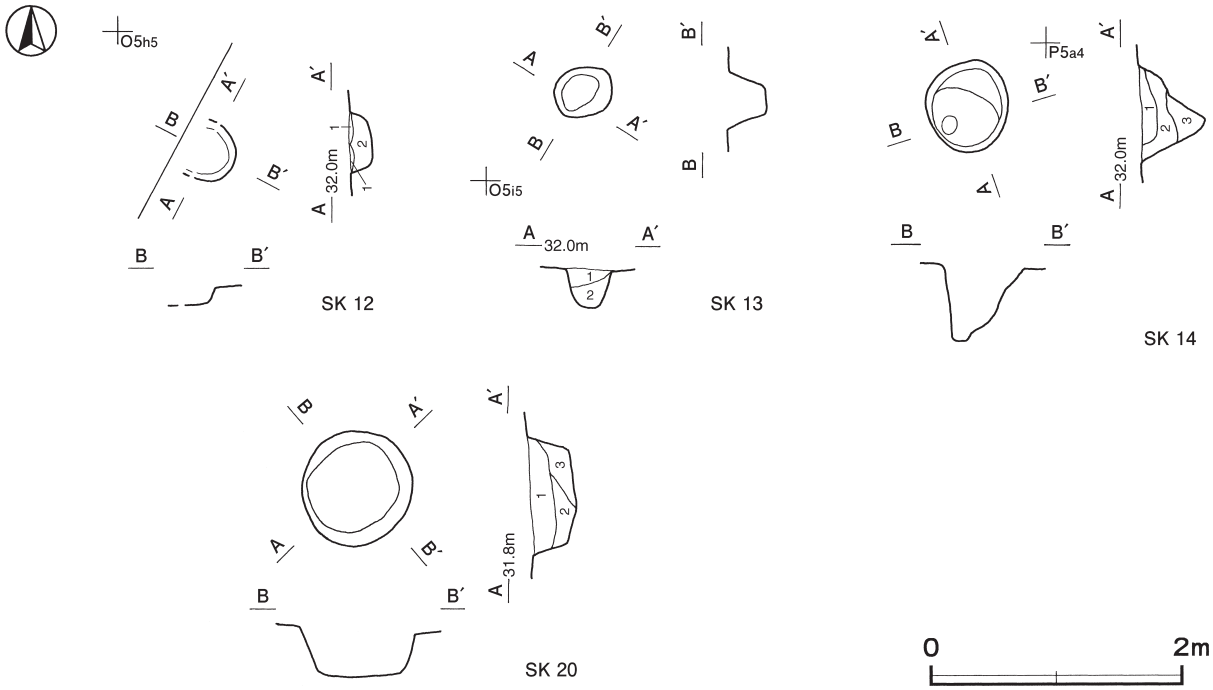


第18図　第10号土坑実測図

所見　詳細な時期は不明であるが，縄文時代の土坑群に近接していることと，規模や形状が類似していることから，縄文時代の可能性がある。



第19図　その他の土坑実測図（１）



第 20 図　その他の土坑実測図（2）

第３号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック多量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子多量

第８号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量

第９号土坑土層解説
1　極 暗 褐 色　ロームブロック中量
2　極 暗 褐 色　ローム粒子少量
3　極 暗 褐 色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量

第 11 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子多量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子中量

第 12 号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 13 号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 14 号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量

第 20 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

表３　その他の土坑一覧表

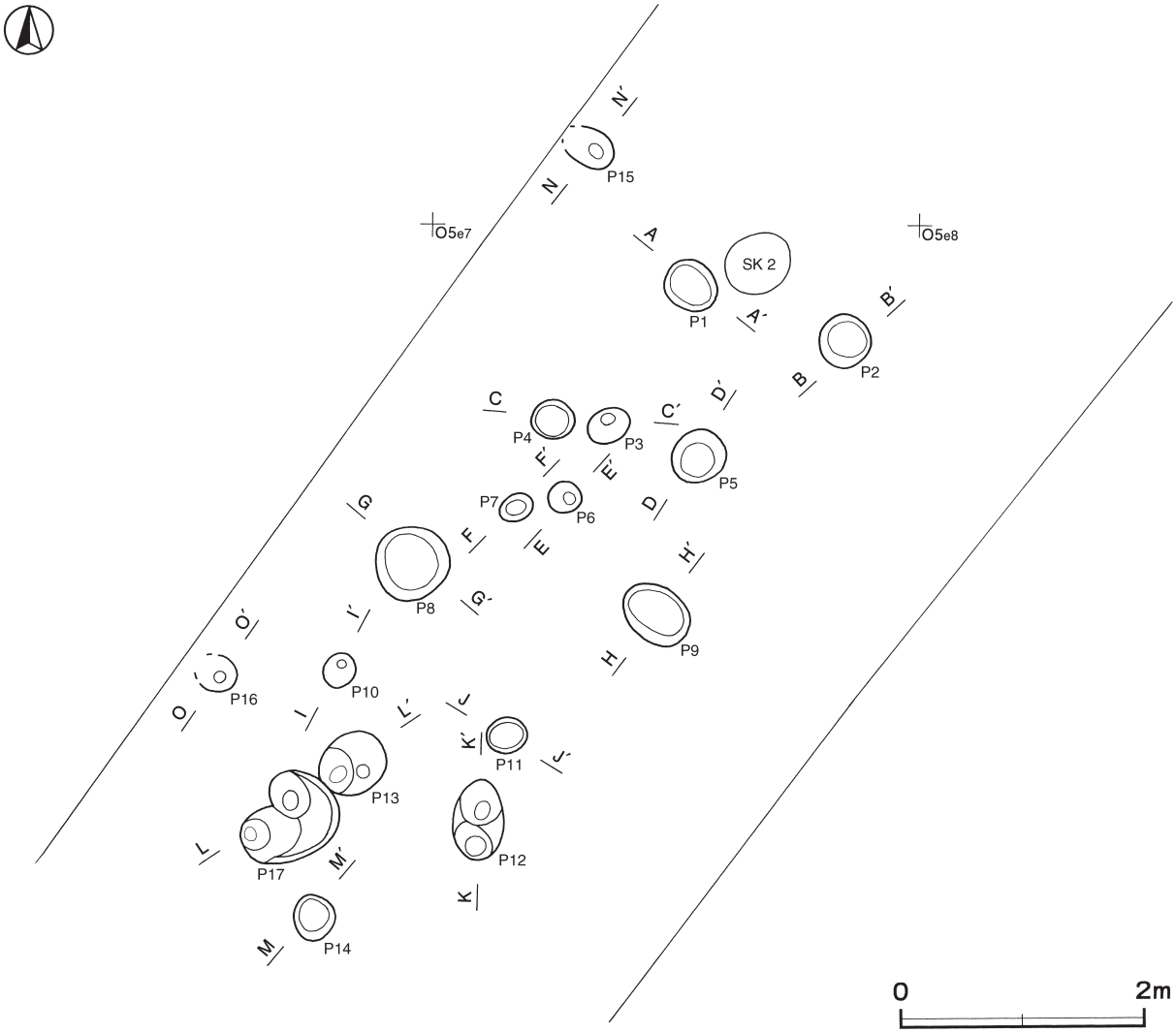
番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					重複関係(古→新)
1	O 5 d8	－	円形	0.95 × 0.94	32	平坦	外傾	人為	須恵器	
3	N 6 i1	－	[円形・楕円形]	1.25 × (0.66)	42	平坦	外傾	人為		
8	O 5 b9	N － 41° － W	［楕円形］	(1.65) × 1.20	38	平坦	緩斜	人為		
9	O 5 b9	N － 54° － W	［楕円形］	(2.23) × 1.50	22	皿状	緩斜	人為		
10	O 5 a0	N － 21° － E	楕円形	1.13 × 0.90	45	有段	外傾	人為		
11	O 5 g5	－	－	(3.52) × (2.90)	26	平坦	外傾	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					重複関係(古→新)
12	O 5 h5	－	[円形・楕円形]	0.48 × (0.25)	18	平坦	外傾	自然		
13	O 5 h5	N － 42° － E	楕円形	0.46 × 0.41	32	平坦	外傾	自然		
14	P 5 a3	－	円形	0.72 × 0.67	62	有段	緩斜・直立	人為		
20	O 5 d8	－	円形	0.92 × 0.88	40	平坦	外傾	人為		

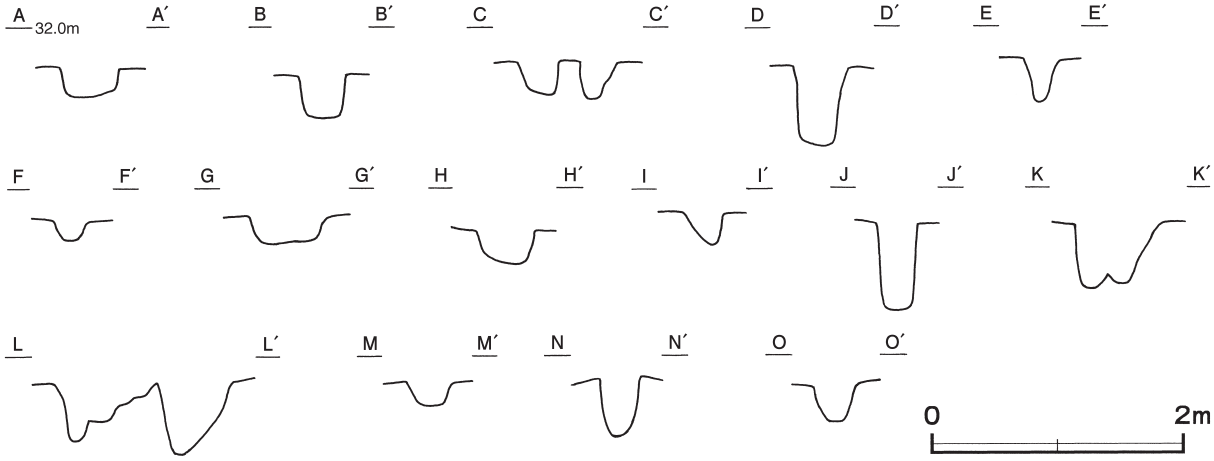
（2）ピット群

第１号ピット群（第 21・22 図）

調査区東部のＯ５d7 ～Ｏ５f6 区の標高 32 mの台地平坦部において，北東・南西方向が約７m，北西・南東方向が約３mの範囲から柱穴状のピット 17 か所を確認した。平面形は長径 26 ～ 82cm の円形または楕円形で，深さは 16 ～ 70cm である。時期は，不明である。



第 21 図　第１号ピット群実測図（１）



第 22 図　第１号ピット群実測図（２）

ピット計測表

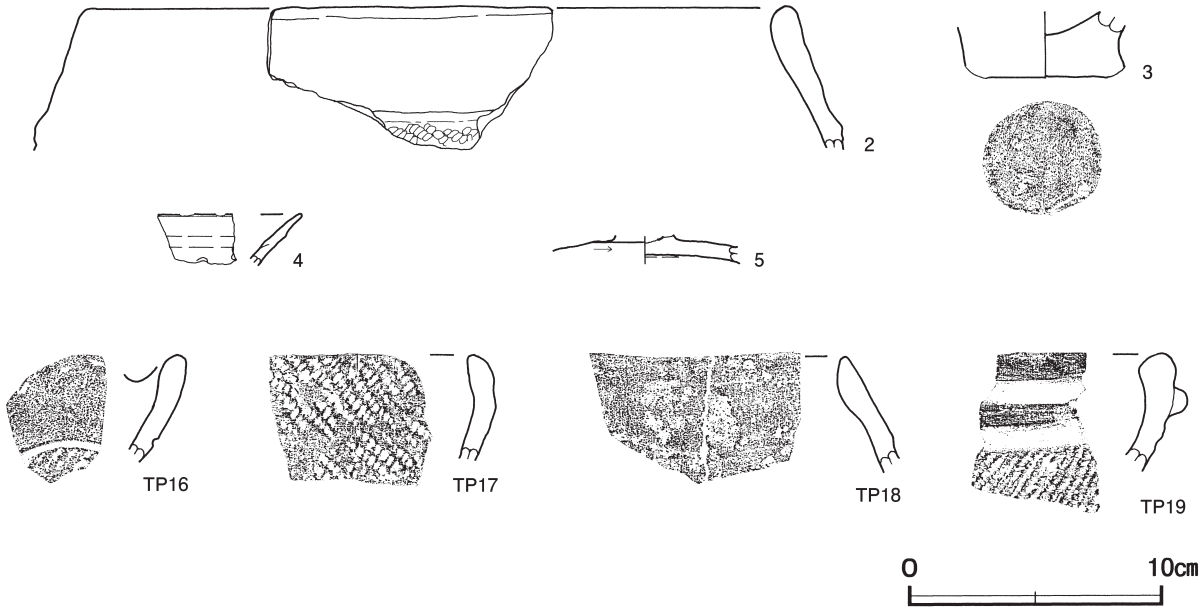
ピット番号	規　模（cm）		
	長径	短径	深さ
1	42	39	23
2	41	40	36
3	33	26	30
4	32	32	28
5	44	44	63
6	26	24	35

ピット番号	規　模（cm）		
	長径	短径	深さ
7	26	21	16
8	60	58	22
9	58	45	28
10	28	27	28
11	34	26	70
12	65	41	55

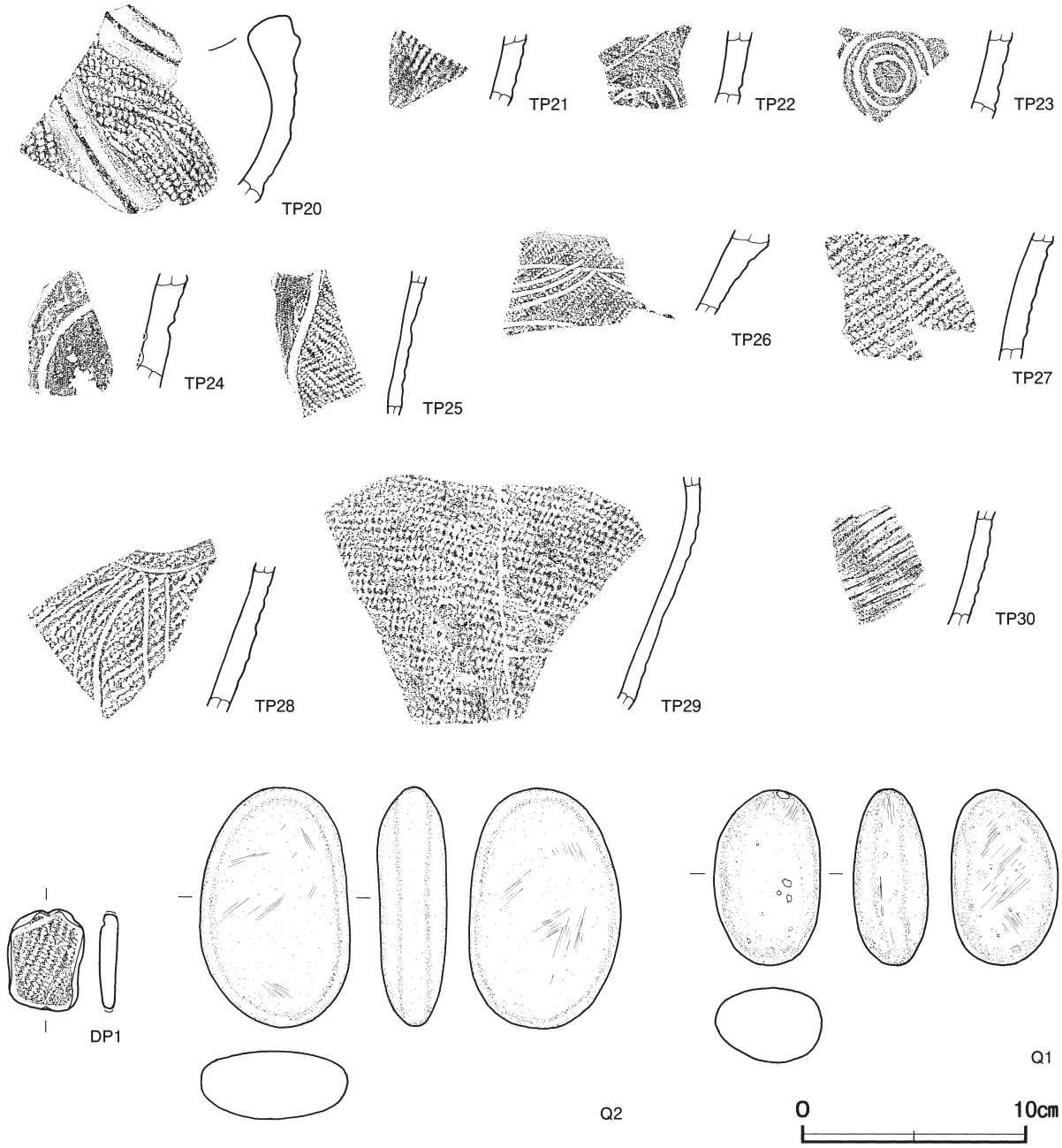
ピット番号	規　模（cm）		
	長径	短径	深さ
13	60	58	58
14	38	34	18
15	(38)	32	48
16	30	(18)	30
17	82	66	47

（3）遺構外出土遺物（23・24 図）

遺構に伴わない主な遺物について実測図及び観察表を掲載する。



第 23 図　遺構外出土遺物実測図（１）



第 24 図　遺構外出土遺物実測図（２）

遺構外出土遺物観察表（第 23・24 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
2	縄文土器	深鉢	[27.8]	(5.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部無文帯　横方向の磨き　２段 RL 単節縄文を施文	SK1	5％　PL 3
3	縄文土器	深鉢	－	(2.7)	[6.2]	長石・石英	黒褐	普通	外・内面ナデ	SK1	5％　PL 4
4	須恵器	坏	－	(2.0)	－	長石・石英	灰	良好	外・内面ロクロナデ	表土	5％
5	須恵器	蓋	－	(1.2)	－	長石・石英	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	表土	30％

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	口縁部無文　LR 縄文を施文　無文帯と文様帯を沈線で区画	表土	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	２段 RL 単節縄文を施文	表土	PL 3

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	橙	口縁部無文　直下に１条の微隆帯を形成	表土	PL 3
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄褐	口唇部無文　直下に隆帯を巡らす　LR 単節縄文を施文	表土	PL 3
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	明褐	２段 RL 単節縄文を施文　隆帯の形成と磨り消しを施す	表土	PL 4
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	LR 単節縄文を施文	表土	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	縄文を施文後沈線による円弧・直線を描出	SK8	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	３重の同心円を沈線で描出	表土	PL 4
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	縄文施文後磨り消しを施す　無文帯と文様帯を沈線で区画	SK8	
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	２段 LR 単節縄文を羽状に施文　磨り消しによる無文帯と文様帯を沈線で区画	SK1	PL 4
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	明赤褐	２段 LR 単節縄文を施文　沈線による波状文を描出	表土	PL 4
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	にぶい褐	２段 LR 単節縄文を施文	SK8	
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	２段 LR 単節縄文を施文　２本単位の平行沈線を施す	表土	PL 4
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	２段 RL 単節縄文を縦位回転で施文	SK1	PL 4
TP30	須恵器	甕	長石・石英・黒色粒子	灰	外面斜位の平行叩き痕	表土	PL 4

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　　土	特　　徴	出土位置	備　考
DP1	土器片錘	4.6	3.4	0.8	16.8	長石・石英	深鉢胴部片利用　周縁部研磨	表土	PL 4

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 1	磨石	7.9	4.7	3.3	178.9	安山岩	表・裏面磨り痕	表土	PL 4
Q 2	磨石	10.8	6.7	3.1	347.2	安山岩	表・裏面磨り痕	表土	PL 4

第４節　ま　と　め

１　はじめに

今回の調査報告では，竪穴住居跡１軒，土坑21基，ピット群１か所等を確認し，当遺跡が縄文時代の集落跡の一部であったことが明らかになった。ここでは，縄文時代における当遺跡と周辺遺跡の様相についてふれるとともに，若干の考察を加え，まとめとしたい。

２　縄文時代の潮来の様子

潮来市において人々の営みを確認できるのは，縄文時代の早期になってからである[1)]。狭間貝塚[2)]は，当遺跡から南へ約1.5kmの距離に位置している。貝層からはハマグリやマガキ，マテガイ等の貝殻とともに，野島式土器，鵜ヶ島台式土器，茅山下層式土器が出土しており，早期に形成された貝塚と捉えられている。貝殻や土器とともに，クロダイやマダイ，スズキ等の魚類の骨も出土しており，海洋性の魚介類が食料とされていたことが分かる。また，シカやイノシシ等の骨も出土しており，陸生の動物も食料とされていたようである。

貝塚Ａ貝塚は，当遺跡から南東へ約500ｍ，貝塚Ｂ貝塚は南東へ約300ｍと近い距離にあり，当遺跡と同じ行方台地上に所在している。貝塚Ａ貝塚からは，縄文時代，弥生時代，古墳時代の集落跡の一部が確認され，縄文時代中期の阿玉台式期から加曽利式期の住居跡や袋状土坑を含む59基の土坑が報告されている[3)]。塙貝塚[4)]と同様，台地上の集落跡の調査によって，貝塚を形成した人々の遺構や遺物が記録されている。

当遺跡と近隣の遺跡の調査報告によって，樹枝状に開析された谷津に面した台地上に集落が存在していたことが推定できる。縄文海進は，縄文時代前期に最も進んだといわれており[5)]，当遺跡の所在する台地が，霞ヶ浦と北浦の二つの湖，利根川や常陸利根川，前川といった河川に面していることを含め，縄文時代の集落や貝塚の存在が縄文海進の痕跡を今に伝えている。

３　集落の様子

ここでは，確認できた竪穴住居跡や土坑について振り返り，遺構全体を捉えていきたい。

（1）出土遺物と各遺構の時期

出土遺物は，主に加曽利Ｅ式土器である[6)]。第１号住居跡の出土土器TP １は，２段RL単節縄文が施文されており，口唇部は無文となっている。TP ２・TP ３はいずれも隆帯と太い沈線が垂下する文様構成となっている。土器の一部分であるので，その他の特徴的な文様を確認することができないので，詳細を述べることはできないが，加曽利ＥⅡ式期からⅢ式期の時期と考えられる。

第４号土坑の出土土器（１）は，２段RL単節縄文が施文され，口縁部は無文帯となっている。第７号土坑の出土土器（TP11）は，隆帯が垂下して文様帯と縦の磨り消し帯を区画している。磨り消し文は，加曽利ＥⅡ式期から見られるようになる。第２号土坑の出土土器（TP ５），第５号土坑の出土土器（TP ６）は，弧状に施された弱い隆帯によって，文様帯と無文帯が区画されている。加曽利ＥⅢ式期の段階では磨り消し文の構成が多様化したり，幅広になったりしていることから，これらの土器は，加曽利ＥⅡ式期からＥⅢ式期の時期と考えられる。また，土器片の中には隆帯の構成から加曽利ＥⅣ式期の特徴を持つものもみられる。

これらの土器にみられる文様は，中期以外の各時期にもあることや土器の一部分からの判断であるので限定はできないが，総じて中期後葉（加曽利ＥⅡ～ＥⅣ式期）に各遺構が存在していたと考えられる。

（2）竪穴住居跡と集落の広がり

当遺跡で確認できた住居跡は，１軒である。第１号住居跡は，遺構確認面で床面が露出していたため，壁の高さや住居の平面形は不明確であるが，炉跡とそれを取り囲む硬化面や不規則な配列の柱穴が確認できた。貝塚Ａ貝塚において調査報告がなされている住居跡にも，加曽利ＥⅡ式期に位置づけられるものがあり，台地上の近接した位置に同時期の集落が存在していた可能性が高い。

この時期の集落は，住居が環状に配置されることが，これまでの研究で分かっている。谷口康浩氏は，『環状集落と縄文社会構造』[7]の中で，集落の重帯構造を提唱し，下総タイプとして千葉県域の住居群と小竪穴（土坑）が二重の環状構造を呈していることを指摘し，これらの集落構造が茨城県域や栃木県域でも同じようにみられると述べている。当遺跡にも，第１号住居跡と同時期の住居が存在していたと考えられ，集落を形成していたと推測できる。既に調査報告[8]されている今回の調査区域に隣接する部分では，住居跡は発見されていないが，縄文時代の土坑の存在や調査区域内から縄文土器が出土していることから，集落の広がりが想定される。

前期に最も進んだ縄文海進は，中期になると海岸線が後退してくる。調査区域は霞ヶ浦と北浦を眼下に見下ろす台地上に所在しており，海岸線が後退してきた時期においても海水面は遺跡からそう遠くない位置にあったと考えられる。貝塚Ａ貝塚[9]や塙貝塚[10]で確認された集落の様相と狭間貝塚[11]の存在は，遺跡と海水面が近い距離にあったことを物語っており，当遺跡における同時期の集落が海水域と関わっていたことを示唆している。

（3）土坑の時期と配置

土坑は，確認できた位置から２群に分けられる。第４～７号土坑は，中期後葉の時期で調査区域の北部にまとまって形成されている。第 15 ～ 19・21 号土坑は，南部にまとまって形成されており，第 16 ～ 18・21 号土坑は，第１号住居跡と重複している。これらの土坑も中期後葉に比定され，断面形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。加曽利Ｅ式期の貯蔵穴の形状は，中期中葉の阿玉台式期に特徴的な袋状土坑が継承され，時間の経過とともに内傾の度合いが小さくなっていくという変遷をたどる[12]。貝塚Ａ貝塚でも，阿玉台式期の土坑や加曽利Ｅ式期の土坑が確認されており，形態的な特徴や変化を読み取ることができる。当遺跡の第 15・16・21 号土坑は，断面形状がやや内傾している。これらの土坑は，出土遺物が細片のため明確な時期を比定することはできないが，袋状の形態が円筒状に変化する過程の土坑と捉えられ，加曽利ＥⅡ式期以降の時期に及ぶと考えられる。

調査区域の中央部はピット群１か所と時期不明の土坑があり，前述の２つの土坑群は独立して存在しているようにみえる。鈴木保彦氏は，「集落の変遷と地域性」[13]の中で，集落と土坑の関係を取り上げ，住居群が環状に配置されたやや内側に土坑が環状に巡っていると述べ，加曽利ＥⅠ～Ⅱ式期に属する事例について紹介している。これらは関東地方では共通する現象と言及されており，当遺跡もこの例に準じるとすれば，調査区域外に住居跡群と土坑群が環状に広がっている可能性がある。

4　おわりに

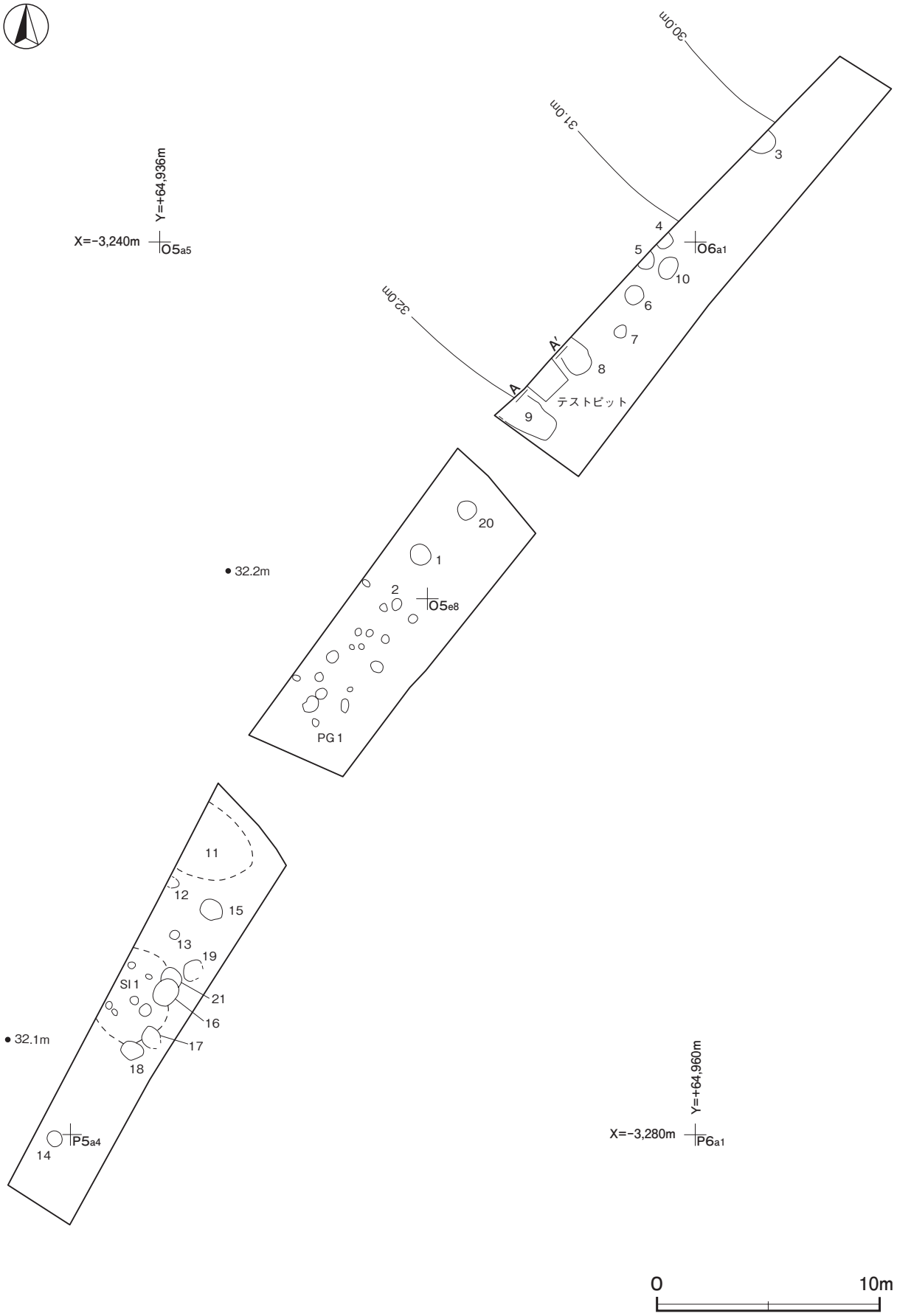
今回の報告は調査区域が矮小なため，遺跡の全容を捉えるところまでは至らなかったが，この時期の住居跡と土坑群の配置の一端を確認することができた。そして，行方台地と霞ヶ浦や北浦の地理的環境から，いわゆる古霞ヶ浦と遺跡の関わりについて考え，近隣の遺跡の様相や千葉県の事例もひもとき，少ない遺構や遺物を取り上げながら遺跡の様相に迫ることに努めた。推測の域を脱しない部分は多々あるが，今回の調査報告が地域の歴史の解明の一資料となるとともに，古霞ヶ浦沿岸地域の縄文時代研究の一助となれば幸いである。

註

1）潮来町史編さん委員会『潮来町史』　潮来町　1996 年３月
2）茂木雅博　袁靖　吉野健一「常陸狭間貝塚」『茨城大学人文学部 考古学研究報告』　茨城大学人文学部文化財情報学教室　1995 年 10 月
3）汀安衛編「貝塚Ａ貝塚遺跡発掘調査報告書」『潮来町埋蔵文化財調査報告書』貝塚Ａ貝塚遺跡調査会　1999 年６月
4）高村勇「一般県道矢幡潮来線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　塙貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 42 集　1987 年３月
5）加藤晋平　小林達雄　藤本強編「縄文人とその環境１」『縄文文化の研究』雄山閣　1994 年７月
6）大川清　鈴木公雄　工楽善通編『日本土器辞典』雄山閣　1996 年 12 月
7）谷口康浩『環状集落と縄文社会構造』学生社　2005 年３月
8）株式会社ノガミ　潮来市教育委員会編『坊内遺跡－携帯電話無線基地局設営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』潮来市教育委員会　2011 年３月
9）註３に同じ
10）註４に同じ
11）註２に同じ
12）横堀孝徳「前田村遺跡の円筒状土坑について」『研究ノート』６号　財団法人茨城県教育財団　1997 年６月
13）鈴木克彦　鈴木保彦編「集落の変遷と地域性」『縄文集落の多様性Ⅰ』雄山閣　2009 年 10 月

参考文献

潮来市教育委員会『潮来市遺跡地図』潮来市　2003 年３月
茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』茨城県　2001 年３月
石井寛「縄文時代後期の住居址内土坑」『縄文時代』22 号　縄文時代文化研究会　2011 年５月



第 25 図　坊内遺跡遺構全体図

第４章　貝　塚　古　墳　群

第１節　調　査　の　概　要

貝塚古墳群は，茨城県潮来市築地字ムクリ山 402 番地２ほかに所在し，常陸利根川の左岸標高約 30m の台地上に位置している。この台地は，東側に北浦を望む舌状台地で，樹枝状の谷が不規則に入り込み複雑な地形を形成している。遺跡の範囲は，東西に約 250 m，南北に約 470 mで台地の平坦部に広がっている。調査区はこの台地の西部に位置し，西側は斜面地で沖積低地に面している。調査面積は 74㎡で，調査前の現況は荒地である。

調査の結果，溝跡２条（中世以降），埋没谷１か所（時期不明）を確認した。

遺物は，遺物コンテナ（60 × 40 × 20cm）に１箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢），陶器（天目茶碗・碗類・鉢類），磁器（碗），土製品（土器片錘・管状土製品），石器（剥片）などである。

第２節　基　本　層　序

調査区中央部（Ｊ８c0）にテストピットを設定し，基本土層（第 26 図）の観察を行った。以下，観察結果から層序を説明する。

第１層は黒褐色を呈する耕作土層である。層厚は 34 ～ 37cm である。

第２層は褐色を呈する砂層で，微量のシルトを含んでいる。粘性は普通で，締まりは強い。層厚は 24 ～ 42cm である。

第３層は黄褐色を呈する砂層で，微量のシルトを含んでいる。粘性は弱く，締まりは強い。層厚は 12 ～ 29cm である。

第４層は黄褐色を呈する砂層である。粘性は弱く，締まりは強い。層厚は４～ 10cm である。

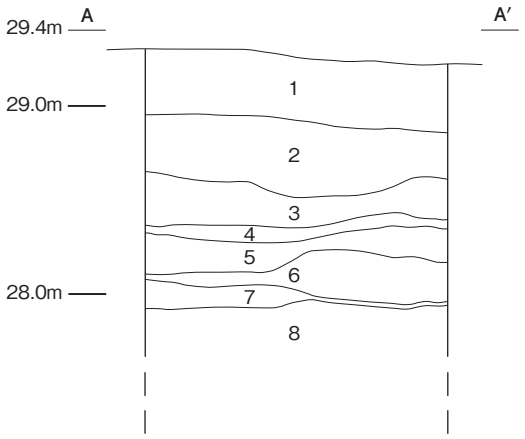
第５層はオリーブ褐色を呈する砂層である。粘性は弱く，締まりは強い。層厚は７～ 21cm である。

第６層はにぶい黄褐色を呈する砂層で，下層には５～８ｍｍの鉄分を含む層がみられる。粘性は弱く，締まりは強い。層厚は３～ 27cm である。

第７層はオリーブ褐色を呈する砂層で，少量のシルトを含んでいる。粘性は弱く，締まりは強い。層厚は３～ 16cm である。

第８層は黒褐色を呈する礫層で，細礫とともに鉄分を含んだ砂粒が堆積している。層厚は 21cm 以上で，さらに下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は，第２層上面で確認できた。



第 26 図　基本土層図

第３節　遺 構 と 遺 物

１　中世以降の遺構と遺物

当時代の遺構は，溝跡２条を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

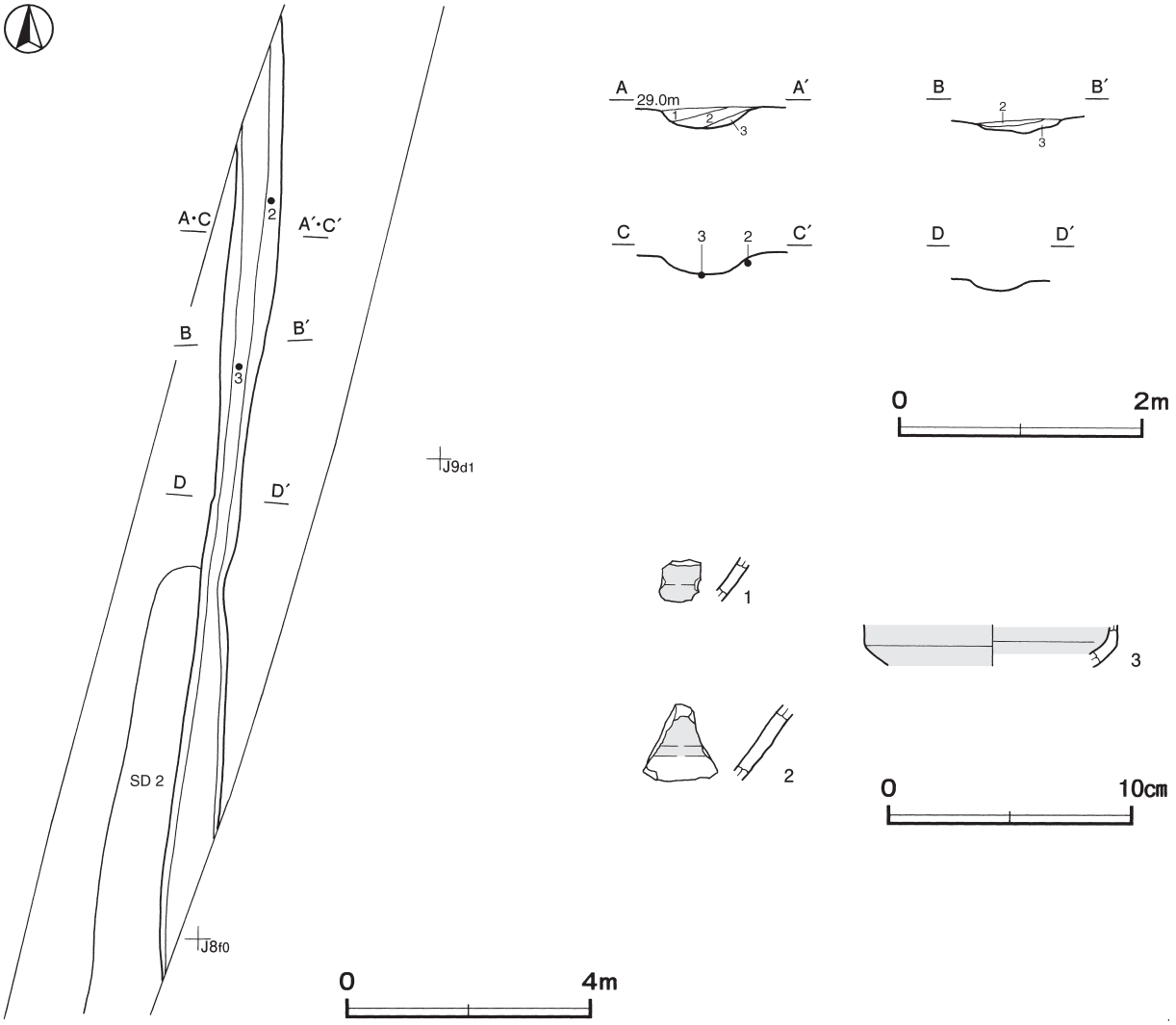
溝跡

第１号溝跡（第 27 図）

位置　調査区中央部から南部のＪ８b0 ～ Ｊ８f9 区，標高 29 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第２号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｊ８b0 区から南方向（N － 174 ° － W）に直線状に延びており，南部と北部が調査区域外まで及んでいるため，確認できた長さは 15.48 mである。規模は上幅 0.35 ～ 0.84 m，下幅 0.17 ～ 0.50 m，深さ７～ 16cm である。断面形はＵ字状で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は，北部が高く，南部に行くに従ってわずかに低くなっている。



第 27 図　第１号溝跡・出土遺物実測図

覆土　３層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況で自然堆積である。

土層解説
１　褐　　色　ローム粒子少量
２　暗　褐　色　ローム粒子少量
３　褐　　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　陶器片４点（天目茶碗２，碗類１，不明１）が出土している。その他流れ込んだ土師器片１点も出土している。２は北部の壁面，３は中央部の底面，１は中央部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　調査区域の西側を南北に走る現道にほぼ並行していることから，旧道の側溝と考えられる。出土土器から中世以降には機能していたと推定され，江戸時代に埋没したと考えられる。

第１号溝跡出土遺物観察表（第 27 図）

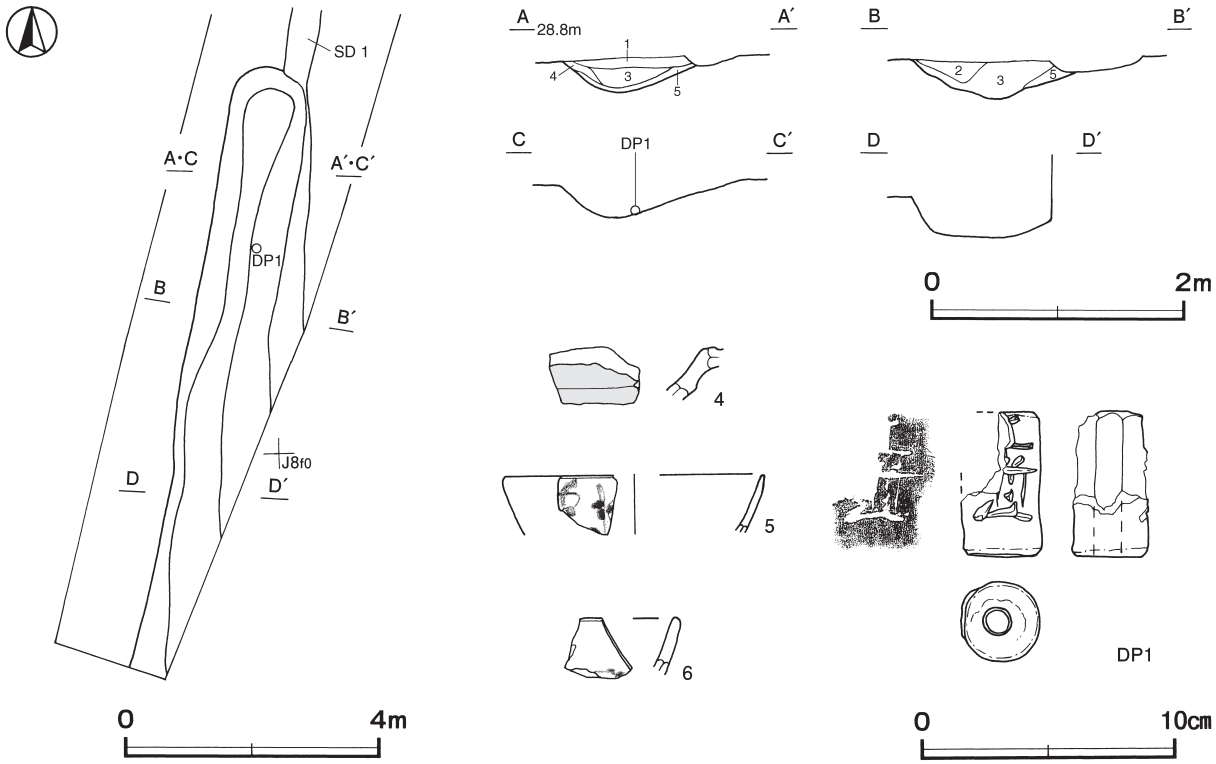
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備　考
1	陶器	天目茶碗	－	(1.8)	－	にぶい黄橙・黒褐	良好	鉄釉	釉は漬け掛け	瀬戸・美濃系	覆土中	５％　PL ６
2	陶器	天目茶碗	－	(3.2)	－	淡黄・暗褐	良好	鉄釉	釉は漬け掛け	瀬戸・美濃系	壁面	５％　PL ６
3	陶器	碗類	－	(1.7)	－	灰黄・灰白・暗赤褐	良好	灰釉・鉄釉	釉は掛け分け	瀬戸・美濃系	底面	５％　PL ６

第２号溝跡（第 28 図）

位置　調査区南部のＪ８d9 ～ Ｊ８f9 区，標高 29 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｊ８d9 区から南方向（N － 169 ° － W）に直線状に延びており，南端が調査区域外まで及んでいるため，確認できた長さは 9.88 mである。規模は上幅 1.28 ～ 1.50 m，下幅 0.30 ～ 0.80 m，深さ 28 ～ 33cm である。断面形はＵ字状で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は，北部が高く，南部に行くに従ってわずかに低くなっている。



第 28 図　第２号溝跡・出土遺物実測図

覆土　５層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況で自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　炭化粒子・砂粒微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
4　暗　褐　色　砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　砂粒中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　陶器片２点（碗類・鉢類），磁器片５点（碗類），土製品１点（管状土製品），瓦片１点が出土している。その他流れ込んだ縄文土器片４点，土師器片４点，須恵器片１点，土製品１点が出土している。４～６は覆土中から，DP １は中央部の底面から出土している。

所見　調査区域の西側を南北に走る現道にほぼ並行していることから，旧道の側溝と考えられる。出土土器から中世以降には機能していたと推定され，江戸時代に埋没したと考えられる。

第２号溝跡出土遺物観察表（第 28 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備　考
4	陶器	鉢類	－	(2.1)	－	淡黄・にぶい赤褐	良好	錆釉	外・内面施釉	瀬戸・美濃系	覆土中	５％　PL ６
5	磁器	碗	[10.2]	(2.4)	－	灰白・灰白	良好	染付・透明釉	外面草花文	肥前系	覆土中	５％　PL ６
6	磁器	碗	－	(2.3)	－	灰白・明オリーブ灰	良好	染付・透明釉	外面草花文	肥前系	覆土中	５％　PL ６

番号	器　種	長さ	径	孔径	重量	胎　土	特　　徴	出土位置	備　考
DP1	管状土製品	5.8	3.2	1.1	(43.4)	長石・石英・雲母	外面ヘラ書き文字 「□道」カ	底面	PL ６

表４　中世以降の溝跡一覧表

番号	位　置	方　向	形　状	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考
				長さ(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)					重複関係(古→新)
1	J8b0 ～ J8f9	N － 174° － W	直線	(15.48)	0.35 ～ 0.84	0.17 ～ 0.50	7 ～ 16	U字状	緩斜	自然	陶器	SD２→本跡
2	J8d9 ～ J8f9	N － 169° － W	直線	(9.88)	1.28 ～ 1.50	0.30 ～ 0.80	28 ～ 33	U字状	緩斜	自然	陶器，磁器，土製品	本跡→ SD１

２　その他の遺構と遺物

今回の調査で，埋没谷１か所を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

（1）埋没谷

第１号埋没谷（第 29 図）

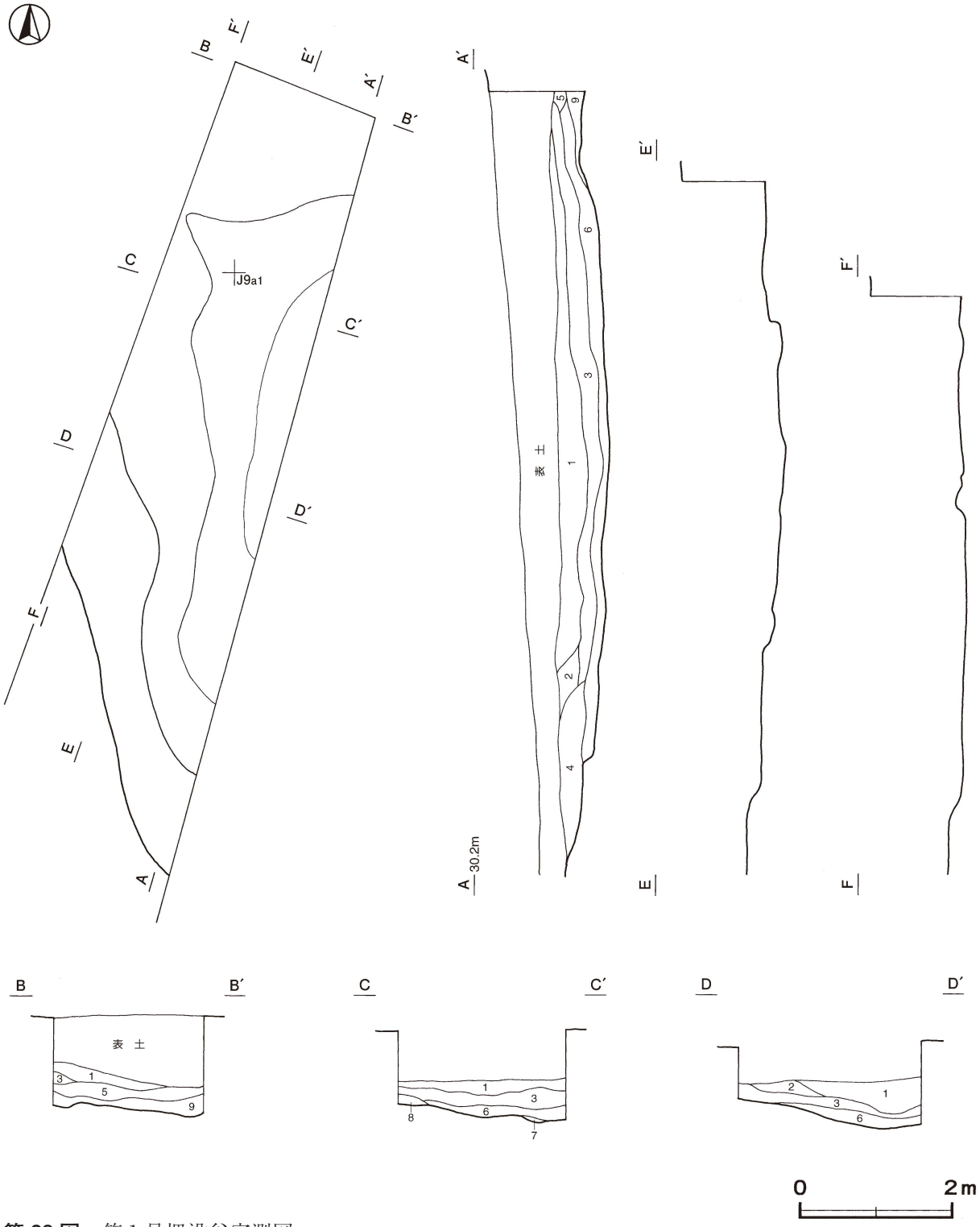
位置　調査区北部のＩ８j0 ～ Ｊ９b1 区，標高 30 mほどの台地平坦部に位置しており，東側に向かって傾斜する谷の一部である。

規模と形状　南北方向に 9.5 m，東西方向に 2.0 mの堆積層で，西から東へ傾斜しており，調査区内における最深部は 62cm であった。

覆土　９層に分層できる。４層から９層にかけては各層ごとの砂粒の含有状況がほぼ均一で，周囲から流入した土砂が堆積している。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・砂粒微量
5　オリーブ褐色　砂粒中量，ローム粒子微量
6　にぶい黄褐色　砂粒少量
7　黄　褐　色　砂粒多量，ローム粒子微量（締まり弱い）
8　にぶい黄褐色　砂粒中量（締まり弱い）
9　黄　褐　色　砂粒多量（締まり弱い）

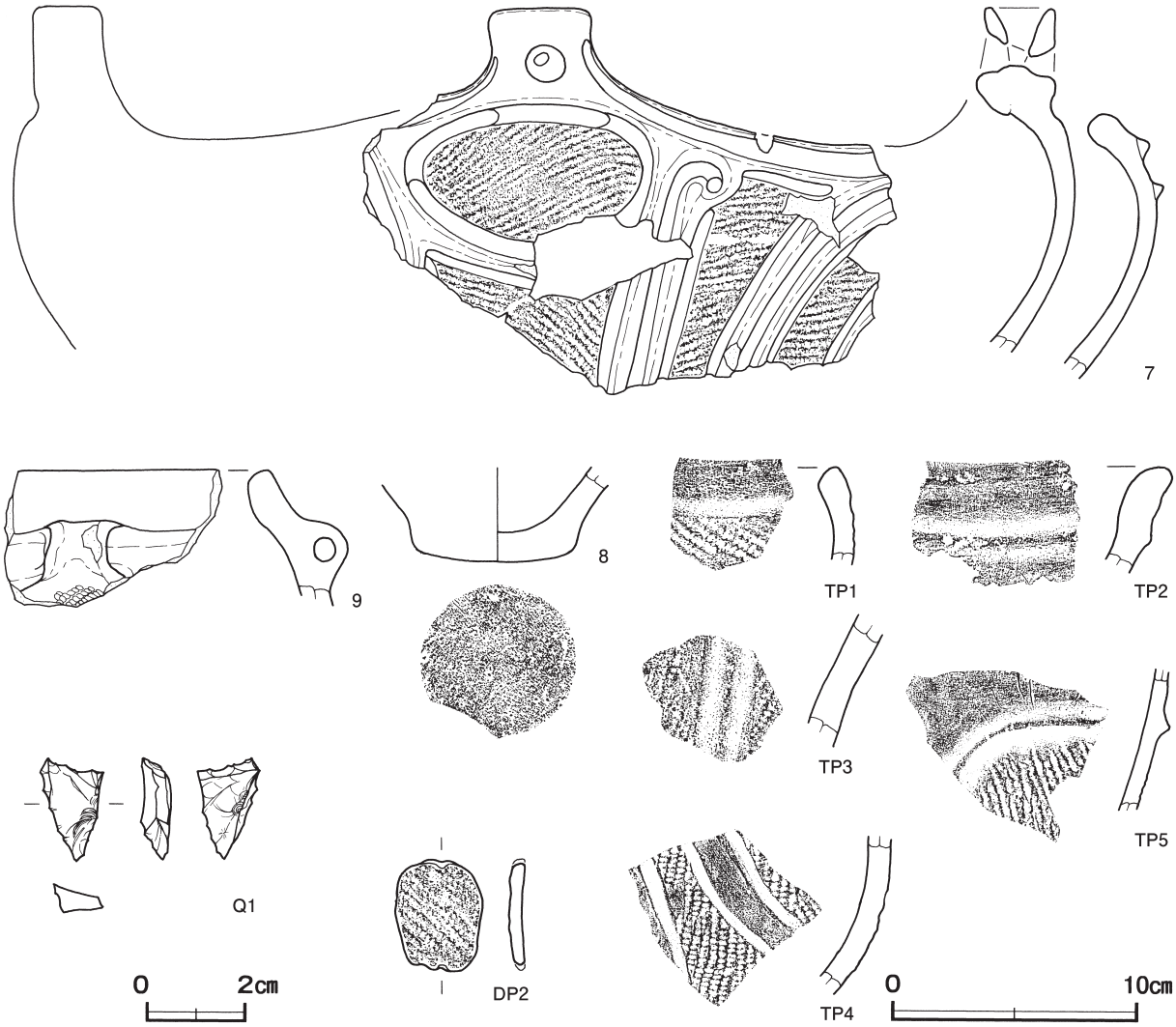
所見　堆積土中から出土した遺物はないが，上面から加曽利Ｅ式期の土器が出土している。埋没谷付近の表土は 32 ～ 94cm で，縄文時代以降の土器が出土していないことから，埋没の過程で流れ込んだ可能性が高い。



第 29 図　第１号埋没谷実測図

（2）遺構外出土遺物（第 30 図）

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第 30 図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第 30 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
7	縄文土器	深鉢	［42.0］	(16.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	良好	口唇部把手状の突出部に交差した穿孔　２条の隆帯を主として曲線を描出　２段 RL 単節縄文を施文	表土	５％　PL 6
8	縄文土器	深鉢	－	(3.9)	6.3	長石・石英・黒色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ナデ	表土	５％　PL 6
9	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐	普通	口縁部無文　穿孔のある突起部形成　以下縦位回転の２段 RL 単節縄文を施文	表土	５％　PL 6

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	橙	口唇部無文　２段 RL 単節縄文を施文	表土	PL 6
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	橙	口縁部無文　横位の隆帯を形成	表土	PL 6
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	２段単節縄文を縦位に施文	表土	PL 6
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	２段単節縄文を縦位に施文　無文帯と文様帯を沈線で区画	表土	PL 6
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄褐	無文帯と文様帯を微隆帯で区画　RL 縄文を施文	表土	PL 6

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	特　　徴	出土位置	備　考
DP 2	土器片錘	4.6	3.6	0.7	14.3	長石・石英・雲母・細礫	深鉢胴部片利用　周縁部研磨	表土	PL 6

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 1	剥片	2.1	1.3	0.6	1.24	黒曜石	上下方向からの剥離痕	表土	PL 6

第４節　ま　　と　　め

１　はじめに

今回の調査で，溝跡２条，埋没谷１か所を確認し，中世以降に活用された道路に伴う溝跡の様子と縄文時代に埋没した谷の一部を明らかにすることができた。ここでは，縄文時代や中世以降の当遺跡と周辺遺跡の様相についてふれるとともに，若干の考察を加え，まとめとしたい。

２　縄文時代と中世以降の遺跡周辺の様相

縄文時代の当地域の様相については，坊内遺跡の第４節に記述したとおりで，当遺跡から谷を挟んで南へ約 240m の距離に坊内遺跡が所在し，貝塚Ａ貝塚，貝塚Ｂ貝塚は，当遺跡から南東へそれぞれ約 700m，約 500m の距離である。当遺跡の南西側にはムクリ山遺跡が隣接しており，当遺跡の範囲内には向野菱山遺跡が所在し，それぞれ縄文時代の遺跡として周知されている。当遺跡周辺の台地上には，数多くの縄文時代の集落が形成されていたことが想定でき，調査区域からも縄文土器が出土したと考えられる。

大生古墳群[1)] は当遺跡から北へ 1.5km の距離に位置しており，東部古墳群と西部古墳群を合わせて約 90 基の古墳が確認されている。当遺跡の範囲内にも大小さまざまな古墳が点在し，その中には中世以降に形成された塚も存在している。調査区域に近接した北側にも塚があり，道祖神が祀られている。塚については，古墳の可能性も視野に入れ調査を行ったが，古墳の周溝は確認できなかった。道祖神の参道を正面にして調査区域の西側には現道が通っており，その景観から古来の街道が現在まで使われ続けたと考えられる。

３　溝跡と道

道祖神は，村の出入口などの路傍に祀られている神で，塞の神とも呼ばれ，古事記や日本書紀の記載の中に起源を見出すことができる[2)]。調査区域はこの社の南側に位置しており，現道が調査区域と社の西側を南北に走っている。調査区域の南側約 200 ｍには，大和武尊が祀られた熱田神社があり，これらの社の付近には古くから街道が通っていたことが推測できる。

溝跡は２条とも，調査区域の西側を走る現道と平行して確認できたことから，旧道に沿う側溝の可能性が高い。道は，古来から往来の増加とともに，街道として機能していくことが多く，現在の道路の原型となっていることが少なくない。旧道が作られた時期は明確でないが，出土遺物から見ると，溝の機能は中世から江戸時代[3)] まで続き，自然に埋没していったようである。

４　おわりに

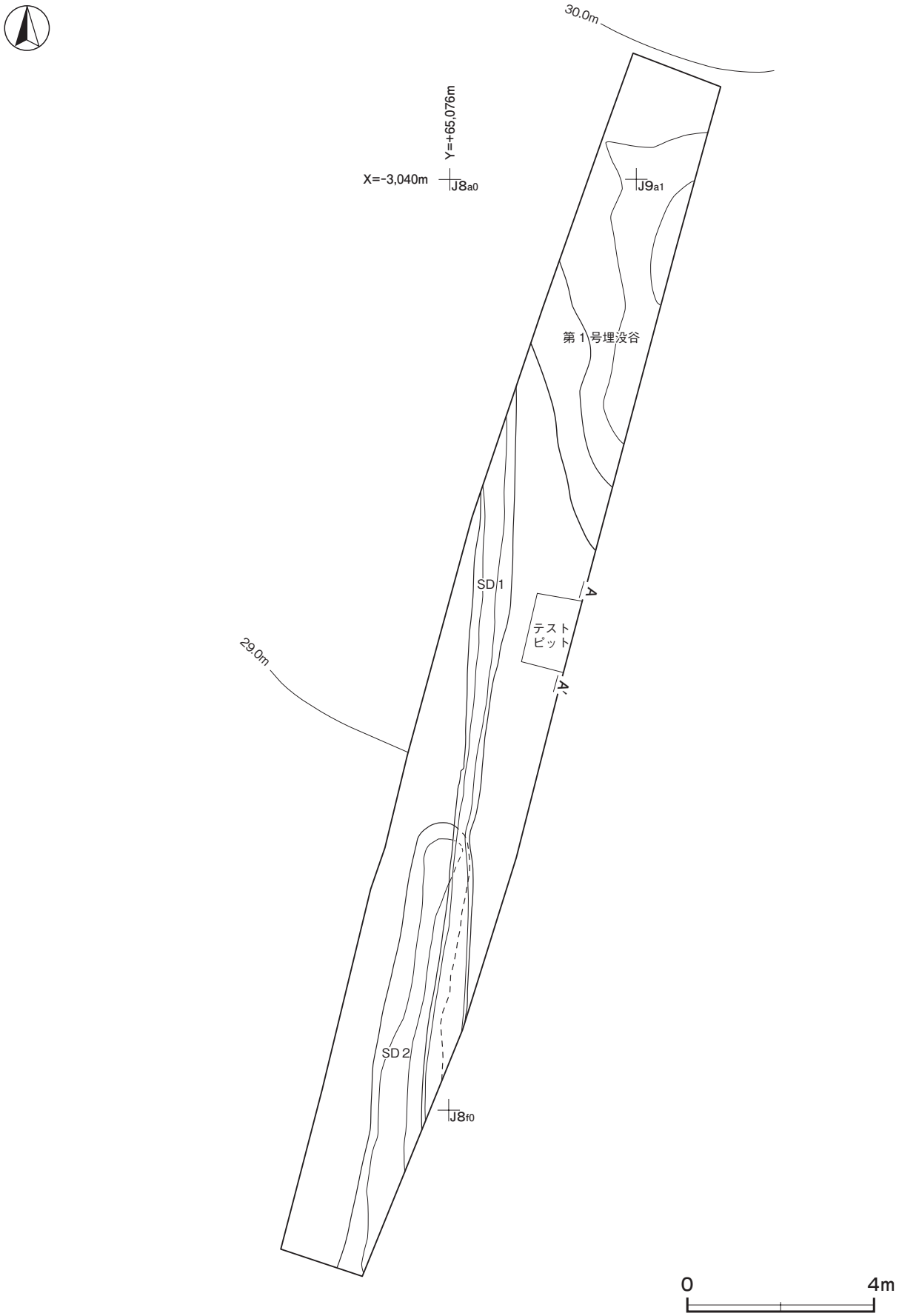
今回は調査区域が矮小なため，遺跡の全容を捉えるところまでは至らなかったが，調査区域を取り巻く環境から遺跡の様相についての若干の考察を加えた。推測の部分は多々あるが，坊内遺跡と合わせて，地域の歴史の解明の一資料となるとともに，潮来市域の考古学や歴史研究の一助となれば幸いである。

註

１）潮来町史編さん委員会『潮来町史』潮来町　1996 年３月

２）鎌田東二監修『日本の神々』東京芸術　2005 年 12 月

３）九州近世陶磁学会編『国内出土の肥前陶器－東日本の流通をさぐる－』 2001 年２月

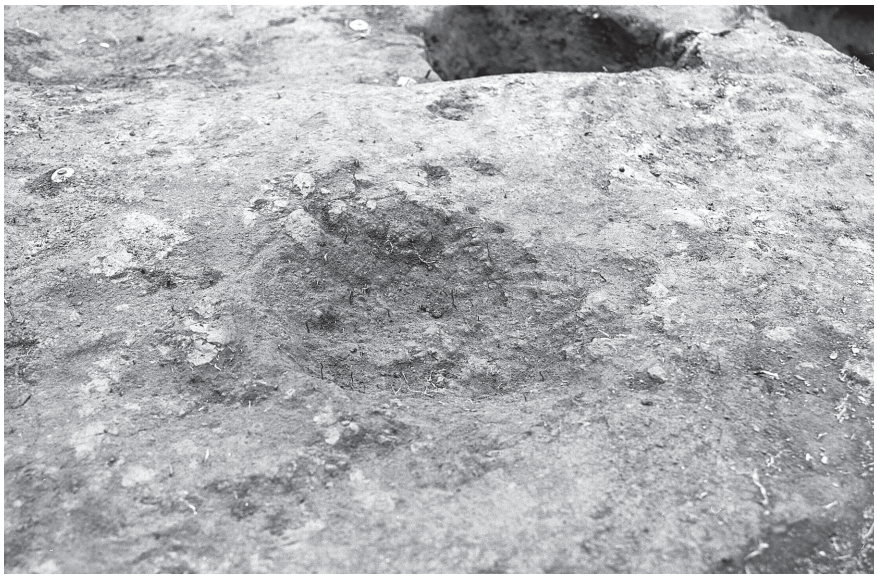


第 31 図　貝塚古墳群遺構全体図

写　真　図　版

坊内遺跡調査区全景（北東から）

第１号住居跡
遺物出土状況



第１号住居跡
炉完掘状況

第１号住居跡
完掘状況

第４・５・６・10号土坑　完掘状況

第15号土坑　完掘状況

第17・18号土坑　完掘状況

第16号土坑　完掘状況

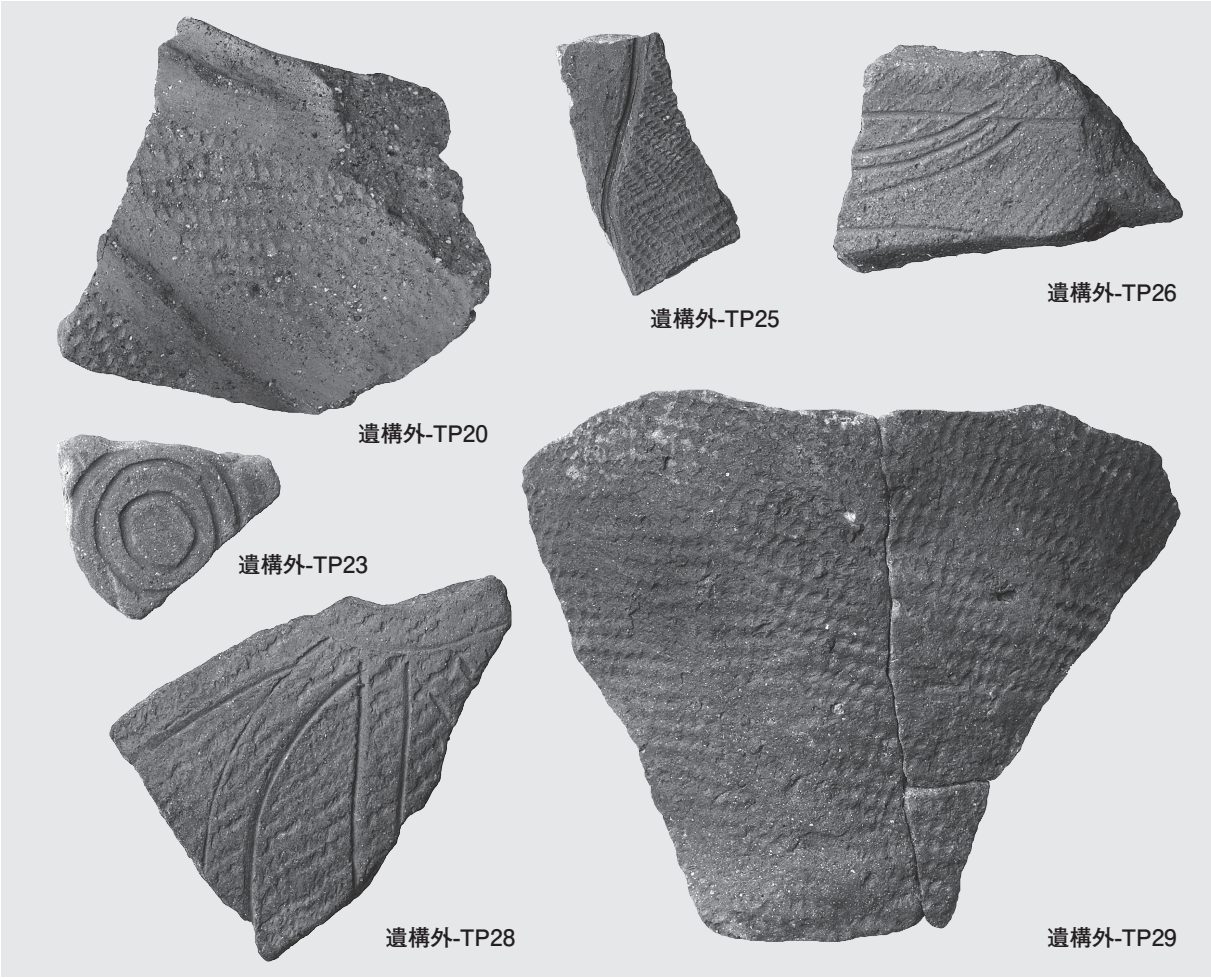
第16・21号土坑　完掘状況

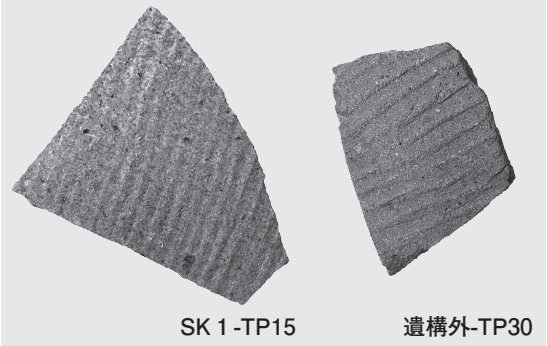
第１号土坑　完掘状況

第１号ピット群　完掘状況

坊内遺跡調査区全景（南東から）

第１号住居跡，第２・４・５・６・７・17・19・21号土坑，遺構外出土土器



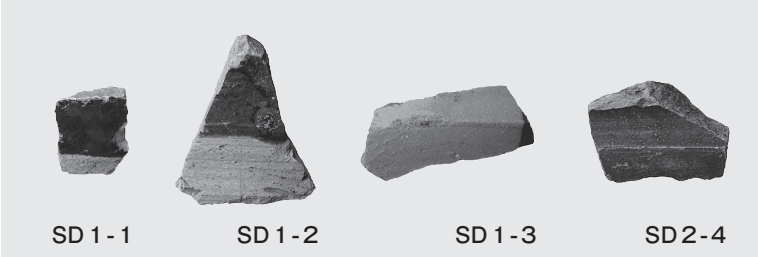


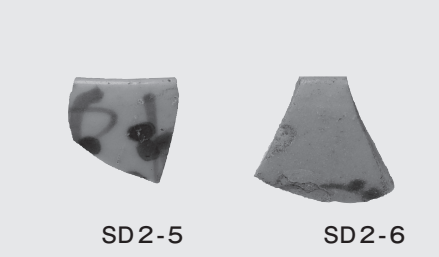
第１号土坑，遺構外出土土器・土製品・石器

貝塚古墳群
調査区全景

第1・2号溝跡
完掘状況

第1号埋没谷
完掘状況





第１・２号溝跡，遺構外出土土器・土製品・石器

抄　　録

ふりがな	ぼううちいせき　　かいづかこふんぐん
書　　名	坊内遺跡　貝塚古墳群
副書名	一般県道矢幡潮来線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第378集
著者名	寺内久永
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029－225－6587
発行日	2013（平成25）年3月15日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
坊内遺跡（ぼううちいせき）	茨城県潮来市築地字坊内153番地4ほか（いばらきけん いたこしついじ あざぼうううち ばんち）	08223－050	35度58分7秒	140度33分12秒	32 m	20110401～20110531	207 ㎡	一般県道矢幡潮来線道路改良事業に伴う事前調査
貝塚古墳群（かいづかこふんぐん）	茨城県潮来市築地字ムクリ山402番地2ほか（いばらきけん いたこしついじ あざ やま ばん ち）	08223－013	35度58分13秒	140度33分12秒	30 m	20110401～20110531	74 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坊内遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　1軒 土坑　11基	縄文土器（深鉢） 須恵器（坏・蓋・甕） 石器（磨石） 土製品（土器片錘）	
	その他	時期不明	土坑　10基 ピット群　1か所		
貝塚古墳群	その他	中・近世	溝跡　2条	縄文土器（深鉢） 陶器（天目茶碗・碗類・鉢類） 磁器（碗） 土製品（土器片錘・管状土製品） 石器（剥片）	

要約

坊内遺跡は，縄文時代の住居跡や貯蔵のために活用された土坑が確認された。住居や土坑を環状に配した集落の一部と推定できる。

貝塚古墳群の溝跡は道路に伴う側溝と捉えられる。

仕　　様

編　集	ＯＳ	Microsoft Windows 7
		Home Premium Service Pack 1
	レイアウト	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×７film　Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組　版	OpenType13級リュウミンPro・Ｌ基本	
	Adobe InDesign CS5	
印　刷	オフセット印刷	
写真製版	スクリーン線数　モノクロ175線	

・印刷所へは，Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものを入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第378集

坊　内　遺　跡
貝　塚　古　墳　群

一般県道矢幡潮来線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年　3月12日　印刷
平成25（2013）年　3月15日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　（有）川田プリント
〒311－0041　水戸市上水戸４丁目６－53
TEL　029－253－5551